

特集



P.4 飯沼信義先生



P.22 副島和久先生

音楽科教育と「言葉」

充実した授業実践のために言葉の感覚を磨く



P.8 此下明雄先生

P.25 前田美子先生、後藤朋子先生、
永網拓人先生、縣麻衣子先生



「言語活動の充実」という課題を意識するあまり、授業内で「話し合い」ばかりが強調されたり、「思いや意図」がパターン化した言葉だけのやりとりに終始してしまったり……。このような話を、最近の音楽科から耳にすることがあります。本特集では、あらためて音楽科教育にとっての「言葉」をさまざまな角度から探ってみました。「作曲家にとっての詩や言葉」「読書」「学習指導要領」「授業」という4つの窓口から、音楽科の授業で今こそ求められる言葉の力を考える手がかりになれば幸いです。

飯沼信義

作曲家にとっての詩や言葉

「言葉」を見つめ直す本特集で最初にお届けするテーマは、「音楽作品と『言葉』」です。お話を伺ったのは、本誌に何度もすばらしいエッセイを寄せていただいている、作曲家の飯沼信義先生。芸術としての「言葉」の魅力や、飯沼先生が作曲にあたってどのような観点で詩を選んでいるかなど、幅広く語っていただきました。

「音(音楽)」は言語に照らしてこそ、 言語を超える存在になる

Vent(以下V)：飯沼先生は多くの歌曲や合唱曲をつくられていますが、今回の特集のテーマである「言葉」について、日頃どのような考えでしょうか？

飯沼：えらく難しい問いかけですね(笑)。……半月ほど前から、ル・クレジオ(1940～ 仏の小説家 2008年ノーベル文学賞受賞)を読み始めています。これまで何回かの来日もあり、私と同年代の人なので親しみを感じていましたが、著作に接するのは初めてです。初期のエッセイ『物質的恍惚』は文庫本で25ページの短い作品ですが、それに続く『無限の中ぐらいのもの』という文章の冒頭にはこのような記述が出てきます。

何ものも、ぼくにとっては言語以外の何ものもない。それが唯一の問題であり、あるいはむしろ、唯一の現実である。すべてがその中に再会し、すべてがその中では協和している。ぼくはぼくの国語の中に生き、その国語こそぼくを構築するものである。言葉は達成であって、道具ではない。

(豊崎光一訳・岩波文庫p.37)

さらに、この本の末尾に解説を寄せた今福龍太氏(1955～)は、ル・クレジオの『氷山へ』から以下の文言を引用しています。

この荒れ果てた拡がり、美しく、自由なこの拡がり。そこで言葉は生まれる、簡潔な、天球の一現象として。

いずれも難しい文章ですよ。でも、とても示唆的な表現だと思います。のっけから、このように他者の言葉を借りてお話しを始めるのは卑怯だと叱られそうですが、共感するところがあり、引用させてもらいました。私にとって「言葉の発見」「言葉探し」はとても苦しいものであると同時に、音楽の創作と同じくらい魅力的な事柄でもあるんです。**V：**「魅力ある言葉」とは、どのようなものですか？

飯沼：いわゆる「自己表出」に深く関わる事柄を書き記そうとするときの言葉、大げさに言えば「文学言語」とか「詩的言語」は、読み手にとっても書き手にとっても、上滑りしない言語、どこかにギザギザしたところをもっていて、引っかかるところをもった言葉でなくてはいけないと思うのです。それは、その「言葉(言語)」を使おうとした人間の喜びとか苦悩とか、息づかいとか体温とか、どこかにレアな身体性をとどめたものでなければ、魅力ある言葉にはならないのではないかと私は読むときも書くときも、あるいは聴くときにも、そのような言葉に強く魅せられますし、自分でもそうした言葉を探していこうと努めています。



私にとって「言葉の発見」「言葉探し」は
とても苦しいものであると同時に、
音楽の創作と同じくらい
魅力的な事柄でもあるんです。

V：音楽だけでなく、先生は言葉も深めているんですね。

飯沼：「言葉では伝えられないものが音(音楽)である」などとよく言われますが、これは誤解しがちな文言だと思います。人間は一瞬の直感から言語を弄る生き物です。洋画家の曾宮一念さん(1893～1994)は「描くべき絵をより確かなものにするため」に文章をつづり続けた人です。言葉で伝えようとする意志や行為をスルーしたら何も始まらない。ですから言語との厳しい突き合わせを省いたところに、いきなり音楽が出現することなどありえないのではないかと私は思うのです。《何ものも、ぼくにとっては言語以外の何ものもない——言葉は達成であって、道具ではない》と語るル・クレジオの言葉には深い共感を覚えます。

言葉を生むということ

V：先生はこれまでに、たくさんの本を読まれたのでしょうか。

飯沼：幼少時から高校生ぐらいまではごく普通の読書体験だったと思います。書物や作家を意識し、謙虚に対峙し、本格的に読み始めた背景には、先年亡くなった独文学者の親友の存在と影響が大きかった。特にトーマス・マンやゲーテ、ホフマンスタール、カフカ、クンデラ、ツヴァイクなどの大作を含む作品を網羅的に腰を据えて読み始めたのは、還暦を過ぎてからなんです。実際、読書と言うものには

十分な時間が必要ですし、精神の余裕とか、内的な欲求とか、静かな思索のための環境とかいったことも自分から積極的に調えることが大事になってきますから、若いうちは仕事の多忙や諸々の関わりでつつい書物との距離が開いてしまいがちになりますね。

V：読んだ本で、特に記憶に残っているものはありますか？

飯沼：子どもの頃に父親が買ってくれたのは『十五少年漂流記』(ジュール・ヴェルヌ)くらいのもので、私は父の本棚から『菊と刀』(ルース・ベネディクト)とか、『ヴィヨンの妻』(太宰治)とか『風にそよぐ葦』(石川達三)、その他西田幾多郎、南原繁らの著作、『柳田國男全集』などを引っ張り出しては、解かりもしないくせに生意気ぶって読み流していました(笑)。高校から大学にかけては小説や詩、エッセイなどをよく読みました。永井荷風、太宰治、井上靖、三好達治、萩原朔太郎、小林秀雄、金子光晴、吉岡実、北村太郎他の多くの作家や詩人たちでした。また、同業の作曲家・音楽家で筆の立つかたがたの著作、例えば小倉朗、高橋悠治、矢代秋雄、團伊玖磨、武満徹、八村義夫といったかたがたの著作はよく読み、今でもときどき読んでいます。

V：語彙を磨くためには、多くの本を読むべきでしょうか？

飯沼：語彙を磨くために特段の方法があるとは思いませんが、言葉を生むということは、その人間が常に自分の内心と語り合っているということが前提とならなければいけないはずです。日々の自問や思索がその人固有の言葉や文体というものを生むのだと考えて

います。その言葉を使う人間のオリジナリティが薫る言語、あるいは話法や話術というものは、その人の日常の思索の中から生まれ出るものだと思います。ですから、例えば学校で先生がたが子どもたちに投げかける言葉や話しかけ方にも当然それは反映するはずです。教師の感性がもろに滲み出る。その辺に散らばっている、上滑りのする薄っぺらで形骸化した言語とは違う、鮮度のある、その先生しか使えない言葉は、子どもたちにとって大きな魅力となり、浸透力をもたらすと思います。

作曲に選ぶ詩

V：詩を読む際、大切にしているのはどのようなことでしょうか？
飯沼：書物や詩集などに書かれた言葉に目をやり、そこからさまざまな情感を感じ取るためには、読み手側にも豊かな想像力というものが必要ですね。北村太郎(1922～1992 詩人)に『詩の詩』という、おもしろい一篇があります(『ぼくの現代詩入門』1982 大和書房)。詩がいかに関読み手に想像力が求められているか、を教えられる詩です。小説でもなく評論でもなく随筆でもない、「詩」とは一体何なのかを、あらためて考えさせられる一篇です。「そのかたちでしか表しようのない言葉のかたち」、それが詩というものではないか……。『詩』とはどういうものか、について述べられた文言を紹介しましょう。

詩とは人生の批評である。 (マシュー・アーノルド／英国の詩人)

詩とは、格調のなかにそそぎこまれた情緒である。

(トーマス・ハーディ／英国の小説家、詩人)

詩とは……他のやりかたでは、どうしてもいうことができないことをいうための、ことばの用い方である。

(セシル・デイ＝ルイス／英国の詩人)

詩とは「直撃力」である――ようするに過激、ラジカル、そんな言葉でいたい装置が、多少とも備わっている言語芸術を「詩」と呼びたい……。 (北村太郎)

詩の精神とユーモアの精神との間には密接な関係がある。 (北村太郎)

また、北村太郎氏の前掲の著作の中にはいくつかの詩が収められていますが、その中に『くらし』(石垣りん)という詩があります。紙面がないのでここでは省きますが、この詩、言葉を失うような感動を与える詩だと思います。こういう詩に接すると、作曲する、しないといった観点はどこかへ吹っ飛んでしまいます。音楽が寄り添う余地などありません。詩人の厳しい思索と、それによって選ばれた言語、時間と流れ、リズム……。一分の隙もなく整えられた詩形。私にとってこのようなすごい作品というものは作曲の対象とはならず、いや、すべきでなく、してはならない、という範疇のものです。これこそ詩そのものであり、その姿のまま存在しなくてはならない、犯すことのできない神聖な姿なのだと思うからです。

V：先生は、どのような観点で詩を選び、歌曲や合唱曲をつくるのですか？

飯沼：それは……。第一に、それが詩人の格調の高い優れた詩的言語によって書かれた奥深い主想を有している作品であり、私自身が十分に共感できるものであること。第二には、さらに、それに対して音楽が寄り添う余地を遺し、それを許してくれていると思われるもの。第三に、用いられている言葉そのものが発していると感じられる音楽的誘惑(予兆とかシグナルのようなもの)を感じ取れるもの、といったところでしょうか。

インタビューは飯沼信義先生のご自宅で行われました

○飯沼信義(いいぬま・のぶよし)

作曲家。1938年長野県生まれ。桐朋学園大学名誉教授。松本深志高校から東京藝術大学作曲科に進み、同大専攻科修了。第32回日本音楽コンクール作曲部門(管弦楽曲)入選。作曲活動のかたわらでエッセイ・小論、あるいは音楽教育に関わる著作も多く、また教育教材などの制作にも情熱を傾ける。作品は数多く多岐にわたるが、近年の主要作品として『人声と管弦楽のための協奏的八章「人間乱舞」』(2000)、『ソプラノと室内楽のための「イル・ドローレ」』(01)、ピアノ独奏のための『花より雨に…』(02)、混声合唱のための『3つの幻景』(03)、合唱とオーケストラのための組曲『われ山に向かいて』(04)などがある。2017年12月には『飯沼信義女声合唱曲集 桔梗 ―金沢智恵子「鎌倉・花詩集」より』が発売された。

子どもはいつか……

V：教育現場では「音楽」も「言葉」も、非常に重要だと思います。

飯沼：そのとおりです。「音楽」は、遠くギリシャ・ローマの時代に端を発し、中世ヨーロッパの大学における基礎教養科目として位置付けられたリベラル・アーツ自由七科の一つとして、人間の基礎教養の一角をなすべく必須科目に加えられていました。また、古代中国にあっても、「音楽」は高貴な身分階級の人間が身に付けなくてはならない基本的教養とされた「六芸(礼・楽・射・御・書・数)」の上位2番目に「楽」として掲げられていました。こうしたことから解るように、音楽は人間形成にとっても、社会秩序の形成や倫理的な知力を身に付けるうえでも欠かすことのできない大事な学問とされていたわけです。音楽も言葉も根は同じで、古代より人間の基礎骨格を支える基盤そのものに関わる重要な学問とされて尊ばれてきたわけです。これは現代においても不変なものであるばかりか、これらの科目は教育の場において最も大切な教科として、その重要性が認識され、充実した授業が行われるべく創意工夫がなされなくてはいけない、と、私は考えています。

V：子どもたちの言語能力を高めるために、大人が注意すべきことはありますか？

飯沼：最近の巷の会話に耳を傾けると「スゲー!」とか「カワイイ!」ばかり。もし、仮にも、今日の子どもたちの言語力、会話力、表現力の実態についての貧しさが指摘されるとすれば、それはとりもなおさず大人社会における大人の言論の貧しさの反映とみるべきでしょう。子どもたちの心の中には、まだ言葉や音にたどり着けない実に多くの茫漠とした感情やら情念やらが渦巻いているはずです。「思い余って言葉及ばず」の状態です。そんなときに、それらを無理やり言葉にさせたり文字に書かせたりするようなことはすべきではないと思う。言葉のストックもなく、想いの整え方も分からない子どもに、無理やり言葉に出して「話しなさい」とか「書きなさい」などと半ば強制的に求めることは酷なことです。今語れなくても、いつか、子どもたちはそれぞれ自分にふさわしい言葉を探し出して、さまざまな場面でアウトプットするはずです。

価値ある「途中」に

V：飯沼先生が音楽科の授業で大切だと考えるのは、どの領域ですか？

飯沼：好きな歌を思い切り歌うことはもちろんですが、子どもたちにとって特に大切な音楽の領域は「鑑賞」ではないかと私は考えます。私の敬愛する作曲家・矢代秋雄さん(故人)もそう言っておられました。ふさわしい環境の中で落ち着いて名作に耳を傾けること、教師が必要最小限の誘い込みの話を添えて、しっかりと聴かせる、それだけで最も大切な授業は完結すると思います。もっとも、これ、授業時数の少ない中での位置付けは容易ではないと思いますが……。

V：聴いたあとは、どのように振り返ればよいのでしょうか？

飯沼：「鑑賞」のあとで「感想」を語らせたり書かせたりすることを、常に一体のものとする必要はないでしょう。「含み」や「余韻」につながる先生の短い一言があれば、それで十分。子どもが聴き取った「思い」や「感動」は、そっとそのままにしてあげることも大事なことです。教育はその時間の中で達成されるものではありません。教育というものは常に「途中(過程)」なのであり、直ちに目に見える成果などありえません。その一瞬、ひとコマ、その一日をいかに価値ある「途中」にできるか、その貴重な過程を実態たらしめるために、教師もまた己を見つめ、日々の自問と思索の中から不断に語感を磨き、音感を磨き、子どもたちの成長の貴重な「途中」と関わっていかねければならない、と思うのです。よく背中で教える、背中から学ぶ……などと言われます。特に絵や音楽や体操など芸術や身体活動に関連する教科においては、子どもたちは教師の無言の営みを密かに観察し、まねしようとします。

V：先生ご自身は、これまでにその「無言の営み」をご覧になったことはありますか？

飯沼：あります。授業が終わるとキャンパスや重たい画箱を背負って写生に出かけ、たんぼの土手にイーゼルを立てて黙々と制作に没頭していた先生、休み時間を惜しんで音楽室に残ってピアノを勉強していた先生、すばらしい身体能力を見せてくれた体育の先生など、その強烈な影響は今でも忘れることができません。音楽の先生はやはり弾いたり歌ったりという演奏実技を常に磨かなくてはなりませんし、そうした努力の姿を子どもの前に示すべきだと思います。詩人の中桐雅夫さん(1919～1983)は『詩の読みかた 詩の作りかた』という著書の中でギリシャの哲学者アリストテレス(前384～前322)の言葉を引用しながら、次のように書いています。

芸術制作の原理は模倣であるから、文芸は言語による模倣である(中略)。

模倣は子供時代から人間には本来つきものであって、人間が下等動物より有利な点のひとつは人間がこの世界で最も模倣力に富む生物であり、まず模倣によってものを学ぶということである(中略)。一般に独創ということばは尊ばれ、模倣という言葉は蔑視されているようですが、アリストテレスのいうような模倣の性質と重要性を認識できない人には、独創の意味も理解できないでしょう。

この文章は、教師は子どもたちから模倣される人間でなければいけない、ということを含意していると思います。板書に上手な字を書く、話しかける言葉がいつも新鮮、フリーハンドで直線も円も正三角形も描ける、歌も上手、ピアノも上手、感動して涙を流す、笑顔がすばらしい、いい匂いがする……。子どもたちのキラキラした眼差しを全身に受けて日々教壇に立てる幸せこそ、教師の生きがいそのものではないでしょうか。

読書活動で 豊かな言葉の世界を

子どもと言葉

次は、「子どもと言葉」をテーマに、愛知県瀬戸市立長根小学校校長の此下明雄先生にお話を伺います。長根小学校は地域と連携したユニークな読み聞かせの活動が評価され、「平成30年度 子供の読書活動優秀実践校」として文部科学大臣表彰を受賞しました。

読書の力

地域と連携した読書活動

本校は、長年にわたり継続的な読書活動の推進に取り組んできました。中でも独自の活動として、毎週金曜日の朝に行われる「葉っぱの会」による読み聞かせがあります。「葉っぱの会」は保護者や地域のかたがたで構成される総勢35名のボランティア団体で、全18クラスに出向いて読み聞かせを行っており、子どもたちはこの時間をとても楽しみにしています。さまざまな本を読み聞かせることで、読書好きな子どもの育成にたいへん役立っています。また、豊かな心を育み、落ち着いた校内の雰囲気づくりにも貢献しています。その他にも、月1回発行している学校通信『長根だより』で読書についての話題を発信し、家庭でも取り組めるよう啓蒙しています。

市の読書感想文コンクールに入賞した子どもたちに、「何冊ぐらい本を読んでいるの？」と尋ねると、月に10冊以上読んでいる子が多数おり驚いたことがあります。また、5年生の国語の授業で「自分が提案したいこと」を発表する場があるのですが、例えば「廊下を走らないようにするにはどうしたらよいか」「教室ですぐ静かになるにはどうしたらよいか」といった提案が出る中で、



絵本の世界に夢中になる子どもたち

今年度は「本を読む量を増やすにはどうしたらよいか」という発表をしている子がいました。「みんな読書をしようね」と語りかけてきたことがじわじわと子どもたちの心に浸透しているようで、とてもうれしく思います。

此下先生に残る1冊

少し古い本ですが、この夏読んだ沢木耕太郎さんの『深夜特急』はおもしろかったです。インドのデリーからイギリスのロンドンまでバスで一人旅をする物語でしたが、旅を通じてたくさんの人と出会い、その出会いから人生について思いをめぐらす主人公の姿に、自分も20代の頃、こんな旅をしていたらなあと思いました。

本の感想については朝礼でも子どもたちに伝えたのですが、「一人旅に出ると、それまで自分が学んできたことを頼りに生きていかなければならないのだなあ」ということを再確認しました。現地の人と話をするために片言の英語を使い、地図を広げて行き先を



読み聞かせの光景。保護者や地域のかたが読み手になる



○此下明雄(このした・あきお)
瀬戸市立長根小学校 校長

定め、所持金の使い方を計算しながら現地のレートで換金する。これだけでも英語、社会、算数の力が必要になってきます。いろいろな教科で学んできたことをいかに駆使できるかが、旅の中身を豊かにできるかどうかにつながってくるのだと思います。

もちろん最近では、「OK Google」と端末に話しかければ、あらゆることに答えてもらえる時代ですが、情報を選択して行き先を決断するのは人間自身です。人生を旅になぞらえる先人も多いですが、豊かな人生を送るためには豊かな学びが必要であることは言うまでもありません。そして、その学びを駆使しながら、周りの人と豊かなコミュニケーションを交わしていく力も大切なことであると思いました。

学校教育と言葉

子どもたちの「話す力」「聞く力」の育成が課題であると感じ、本年度は「話す力・聞く力を伸ばし、互いの考えを深め合うことができる児童の育成」を研究課題にして取り組んでいます。自分の考えを相手に伝えられる力、仲間の考えを聞いて自分の考えと照らし合わせる力を付けて、深い学びのできる子どもたちを育てていきたいと考えています。

どんな教科でも、言葉を介して新たな発見をしたり、考えを深めたりしています。それはコミュニケーションという形であったり、文章で書き記すということであったりしますが、豊かな語彙力が豊かな学びへとつながることは明らかです。このことから、子どもたちに言葉の大切さを伝えていく必要があると考えています。

私は数学が専門ですが、1つの問題を解くにもいろいろな手法があります。数学的に見て最も美しいすっきりとした解き方というのがるように、言葉も回りくどくならず順序立てて、相手にストレートに伝わる語りかけができるよう練習することが大切なのではないでしょうか。

音楽を取り入れて

「読書」をテーマにしたコンサート

昨年6月、「本を読もう！～Book Paradiseコンサート」と題し、作曲家の弓削田健介さんをお呼びして「読書」をテーマにしたコンサートを開催しました。弓削田さんの作品集『図書館で会いましょう』に収録されている曲を中心に、子どもたちと一緒に歌う合唱も交えるなど、本の魅力が存分に伝わるコンサートになりました。



作曲家の弓削田健介さんによる
「本を読もう！～Book Paradiseコンサート」。
本や図書館にまつわる楽しい歌が演奏された

その中で、弓削田さんが「全国的に見ると本を読む量が減ってきている。もっと本を読もう」ということをコンサートで言われていました。その言葉が子どもの心に留まり、「本を読む量を増やすにはどうしたらいいのかな」と子ども自身が考えるきっかけになったようです。朝礼でも話はしているんですけど、やっぱり弓削田さんの一言は影響力があるなと思いましたね。



弓削田健介作品集
『図書館で会いましょう』

作品集の中に『本を読もう～BOOK UNIVERSE～』という曲があります。曲の説明のところに「読書週間などで使える歌」「『本の時間』の雰囲気作りに」などと書かれていたので、さっそく活用することにしました。8時25分にチャイムが鳴るのですが、チャイムの代わりにこの曲を流すことにしてみました。今では、その音楽が流れると子どもたちは遊びをやめてさっと教室に入ります。教室へ向かう途中、「♪本を読もう！ もっと本を読もう！」と歌詞を口ずさむ子もいて、なんともほほえましい朝の1コマになっています。

よい曲に会うこと

昔覚えた歌を大人になってから口ずさんでいて、「あれ？ この曲って、こんな意味が込められていたんだ」と、かなりの時間を

経てから、歌をつくった人の想いに気が付くことがあります。その歌を歌っているときの、その人の心の状態しだいで響く歌詞があるからでしょう。だから、よい曲に出会っておくことは、その人の人生を豊かにすることにつながるものだと考えます。

そのような意味でも、子どもたちが弓削田さんの曲と出会えたのは、とても大きなことでした。弓削田さんのもつ「愛情たっぷりの優しい世界観」は、子どもたちの心に温かいスープが満たされていくような感じがします。長根小学校では『Dream & Dream～夢をつなごう～』『図書館で会いましょう』『あした天気になあれ』などを全校合唱してきましたが、将来これらの曲のフレーズを何げなく口ずさむときに、懐かしい気持ちと一緒に、人としての温かい心をもって生きることの大切さも思い出してほしいと願っています。

座 談 会

平成16年に発足して以来、長根小学校で読み聞かせの活動を続けている「葉っぱの会」。保護者や地域のかたがたを中心に、現在35名で運営しています。今回はメンバーの皆さんに、読み聞かせの活動に対する思いを座談会形式で語っていただきました。



「葉っぱの会」のメンバーたち

Vent(以下V)：読み聞かせの本というのは、皆さんが実際に読まれてよかったものを持ち寄るのですか？

Q：立ち話をしながら「この本おもしろいよ」「自分の子どもに読んだら笑ってくれたよ」といった情報交換をしながら選んでいます。

V：その学年に合った本などは決まっているのでしょうか？

Q：決まりはなく、それぞれの感性で選んでいます。自分たちが読みたいものを読むような形です。

Q：私が持っている津波の話の絵本は、5年生から始めて、6年生、4年生、今日は3年生のクラスで読みました。最初は上級生だけのつもりでしたが、下級生にも読んでみたらどうかと思い、学年を下げてみました。そのうち2年生のクラスでも読む予定です。学年によって反応は違いますが、だいたい真剣に聞いてくれます。

此下：防災意識を高めることと読み聞かせとのコラボ

レーションが誕生しましたね。

Q：「難しい話だから小さい子どもたちには読まない」ではなくて、「難しい話でも小さい子はそれなりに受け止めている」こともあります。

V：個性的な読み聞かせをされるかたもいますか？

Q：紙芝居のおじさんがいます。在校生のお父さんなんですが、「今日は紙芝居のおじさんだった」と子どもが喜びます。

Q：英語で読み聞かせをする人もいますよ。英語の得意な人が担当しますが、子どものために特技を生かせる場があるって、すてきなことだと思います。

Q：あと、詩を読まれるお母さんもいましたよ。ほんとうにさまざまです。

V：型にはまらない感じですね。

Q：「これを読まないといけない」となると、たぶん読み

手も増えない。楽しそうにやっていたれば人は集まるじゃないですか。「失敗したって大丈夫」という雰囲気をつくと、「じゃあ、やってみようかしら」となります。

V：子どもたちの反応がよかったり、いまひとつだったりとといった違いはありますか？

Q：同じ本を読んでも、クラスによって反応が違います。盛り上がるクラスもあれば、思いのほかシーンとなってヒヤヒヤするクラスも……。

此下：先週のクラスは笑ってくれたのに！ という感じですね。

Q：ぶっつけ本番で読んだりすると、「間違えちゃってごめんね」ということもあります(笑)。でも、大人だって失敗するときもあるということを分かってもらいよい機会になります。

V：「お父さんお母さんや地域のかたが読んでくださる」ということ自体が、子どもたちの心に響くように思います。

Q：私は保育士をしているのですが、保育園では本をたくさん読み聞かせするんですよ。でも普通は、小学校に入学すると自分で本を読むことはあっても、読み聞かせをしてもらう機会はほとんどありませんよね。だけど人の声ってすごく耳に残る。何げない歌の歌詞が残るのと一緒にです。だから、長根小学校の取り組みは、ほんとうに大切なものだと思いますね。

V：「葉っぱの会」は主にどのようなメンバーで結成されているのですか？

Q：ももとは保護者です。在校生の保護者が立ち上げて始まったのですが、自分の子どもが卒業しても残っている人が多い。最近は地域のかたも入ってくださって進化しています。

V：全部で何名いらっしゃいますか？

Q：35名です。立ち上げ当初は人が足りなくて、全クラスには入れませんでした。それに、子どもたちも読み聞かせというのに慣れていないもんだから、教室に行っても「はあ～？」といった顔をされたり、聞いてくれなかったりして悲しかったです。でも、ある日スイッチを切り替えて、「聞きたい人だけおいで～。聞きたくない人は何をしてもいいけど静かにしててね」と言って読み始めたんです。そう言うのと逆に子どもは気になるようで(笑)。ちょこちょこ見てくれるようになって、徐々に今のスタイルになりました。強制したら子どもは聞きたがらないものです。

V：最初は苦労されたのですね。

Q：大変でした。読み手の人集めも必要でしたし、できるだけ多くのクラスに入れるよう、2クラスまとめて合同でやるなど、いろいろな形を取りながら少しずつクラスを増やしていきました。

Q：今でも、入学したばかりの1年生は大変ですよ。1学期はざわざわしていますが、上級生の姿を見て「こういうふうに聞くもんなんだ」とだんだん気が付いてくるようです。

Q：読み聞かせを通じて「ちゃんと座って静かに聞く」といった集団生活のルールを学ぶのは、家でお母さんが100回言うよりも効果的なんじゃないかな。

Q：読み聞かせをしてくれる大人たちに見守られていることを、子どもはよく分かっています。「この人知ってる！」「いつも通学路でおはようって言うってくれる人だ！」といった感じでよく覚えてるんです。

V：地域ぐるみで子どもたちを見守っているんですね。

Q：朝の忙しい時間の15分って貴重ですよ。金曜日はゴミの日なので、読み聞かせに向かおうとすると、もう大慌てです(笑)。でも、子どもたちが喜んでくれることを励みに続けています。

Q：どのクラスも必ず最初に挨拶をしてくれますが、「〇〇さん、お願いします」と名前を言われるのはうれしいですね。でも、たまたま号令係が自分の子どもだったときは笑ってしまいました。

V：活動が長く続く秘訣は何でしょうか？

Q：皆さんすごく温かいんですよ。うっかり当番を忘れちゃっても怒られないし、子どもの体調が悪くて急遽行けなくなっても「大丈夫だよ」と言うってくれるので続けられます。

V：皆さんの温かいつながりが印象的です。すてきな話を聞かせていただきありがとうございます。



手作り大型絵本の制作風景。「葉っぱの会」のメンバーたちが、塗料を使って模造紙1枚1枚に絵を描く。年間1冊のペースで仕上げている。

授業者に訊く―①



子どもたちは次々に変化するピアノに反応して、活動を変えていく。写真は「おなかの体操」（ピッチパイプを使ってアカペラで歌う）。岩井先生がこの活動の合図（高音域から低音域までの速い逆アルペジオ）をピアノで奏でると、子どもたちは即座にこの体勢をつくった

今回の「授業者に訊く」は、私立小学校と国立大学附属小学校の授業です。最初にご紹介するのは、桐蔭学園小学部の6年生。岩井智宏先生はねらいに即して、体を動かす活動や唱歌、遊び歌、リコーダー、ゲームなど、さまざまな活動を取り入れて指導されています。広い音楽室を有効に使ったスピード感あふれる授業の間中、息を切らしながらも楽しそうに、目一杯体を使って活動に取り組む子どもたちの姿が印象的でした。子どもたちの将来を見据えながら、音楽の力を伸ばしていくためのポイントや工夫、注意していることについてお話を伺いました。

授業者：岩井智宏（桐蔭学園小学部） **聞き手：**佐野 靖（東京藝術大学）

本時の授業の位置付け

音楽科の授業では、一つの授業の中でさまざまな要素の活動をする場面が多いため、題材を通してそれぞれの内容を5つほどのステップとして考えています。

その中で本時は、ステップ4の「重ねたハーモニーを心地よく感じることができる」という場面です。合唱の醍醐味であるハーモニーに着目してクラスみんなの声でつくり出す音楽の心地よい世界を体感し、最終的にステップ5の「歌詞と曲想を照らし合わせて思いをもって歌える」につなげていけたらと考えています。

指導において大切にしている点

- 音楽の授業においていちばん大切なのは、子どもたちの「心の解放」です。技術・知識の前に音楽で子どもたちの心を解放し、前向きな意欲を導いていきたいです。
- 楽しい活動の中にも学ばせたいねらいをひとつもつことでその教材は偉大な教材に変化します。ねらいに応じて一つの教材も提供方法に何種類ものバリエーションが考えられます。本時の目標である「ハーモニー」を感じるための声の出し方や、他者の声にも耳を傾ける意識を大切に活動して取り組ませます。
- これらの常時活動の積み重ねを通して、本活動である『ふるさと』の合唱によりスムーズに取り組むことを目指します。
- 最後は音楽のつくり出すハーモニーの世界を感じ、達成感を味わってほしいです。

授業の流れ

	学習の内容、学習活動
導入 (15分 20秒)	- 音楽に合わせた体操 - 発声につながる声出し遊び - ハローハロー（常時活動） - 今月の歌『まっかな秋』
展開1 (14分 30秒)	- ハミングワールド - 耳の確認リトミック - わらべうた（常時活動） - おなかの体操
展開2 (8分 50秒)	『ふるさと』 主旋律、副旋律の確認 →歌詞への意識
まとめ (6分 20秒)	2つの旋律でハーモニーをつくる - さよならのうた



澤本 敦 先生
桐蔭学園小学部 校長

活発な「学び合い」の中で、一人一人が「主役」として生きる音楽授業～心と体が解放され、学ぶ意欲と集中力が高まる～

耳と体で覚える

佐野：先生の授業、大変楽しく拝見しました。いつもあのような形で授業をされているのですか？

岩井：はい、毎回同じです。

佐野：広い空間をうまく使い、子どもたちが自由に教室内を歩き回りながら即座にグループをつくったりペアになったりするので、いろいろな方向から声が響いておもしろかったですね。

岩井：ありがとうございます。

佐野：体感することを大事にしつつ、スピーディーに展開される先生の授業スタイルは、子どもにとってとても効果的で、子どもたちが盛り上がったあとでも、集中力はとぎれませんでした。



○さの・やすし

東京藝術大学教授（音楽教育）。『唱歌・童謡の力：歌うこと＝生きること』『文化としての日本のうた』等を刊行。文化庁プロジェクト「アートによる復興支援」等で学校・地域・大学が協働するアウトリーチのプロジェクトに取り組んでいる。2016年度より、東京藝術大学学長特命・社会連携センター長に就任。

岩井：そこも大事にしています。「ふーっ」と言ったら静かにするなど、盛り上がったあとのけじめを大切にしています。

佐野：このスタイルの授業を始められたのはいつ頃ですか？

岩井：今のスタイルは以前勤めていた学校の小さな音楽室で生まれたものです。教え始めの頃、子どもならば普通に歌うものだと思っていたのですが、そう簡単にはいきませんでした。声を出したとしても、音楽にのめり込むことは難しい。そこで原点に戻って「音楽で大切なのは何だろう」と考えてみたとき、「何かやってみよう」と子どもの気持ちが前向きになることが重要だと思ったのです。私はそれを「心の解放」と呼んでいます。教師の求める空間をつくりたいなら、まずはその「心の解放」が必要です。そのためにどうしたらよいか考えたのが、現在のスタイルをつくることになったきっかけです。

佐野：「心の解放」は難しいですよね。授業では、子どもが何を言っても許される雰囲気をつくることが重要です。脳科学者の茂木健一郎さんが以前、教育は「探索のための安全基地」をつくらないとだめになるとおっしゃっていました。音楽が苦手とか、声を出したら笑われるとか、そういう意識をもったままだと脳がだめだと思い込んで、子どもは萎縮してしまう。

岩井：そうなんです。特に歌はすごく難しいですよね。

佐野：歌唱は本人が「歌おう」という気持ちにならないと声が出てきませんから、そうした思いを引き出すのが大切です。先生のスピーディーな授業展開に、子どもたちはハアハア言いながらも一生懸命についていきました。

岩井：ときどき「リコーダーの授業で、子どもたちが勝手に吹いてしまうのですが、どうしたらいいですか？」と聞かれることがありますが、僕の授業では時間を置かずですぐ曲を吹き始めるので、勝手に吹いてしまう暇がありません。子どもたちって、すぐに

音を出したいんですよね。子どもたちが次に何をするのか分からない段階では、1回ぐらい説明が必要でしょうが。



○いわい・ともひろ
桐蔭学園小学部 音楽科教諭

佐野：今は考えることがとても重視されていて、授業の中でも友達と相談し合ったり、一人で考えたりする時間が設けられます。ただ、子どもは何か別の行動をしながらでも考えることができますと思います。それに子どもは耳がよいから、ピアノやリコーダーなどの音が鳴っていても、先生の指示は聞こえているんです。

岩井：僕の授業では、音を聴くことが大切です。「次はこれをします」とはほとんど言いません。子どもたちがピアノの音を聴くだけで、「ああ、あの曲だ」と次の流れを分かかってほしいのです。

佐野：子どもたちは、まず耳や体で音を覚えるのでしょうね。

岩井：体に覚えさせたそのあとで、「今の音はこうだったんだ」と知識を植え付けるようにしています。できたことを音符にしてみる。歌えた旋律をリズム読みしてみる。そうすると〔共通事項〕に触れたときに、子どもたちの抵抗感はありません。



歌えたあとに、リズムや音を学習する

音楽を通した人間教育

佐野：このスタイルを築くにあたって、参考にされたものはありますか？

岩井：たくさんあります。まずさまざまな授業見学や研修などに参加してみて、おもしろいと思ったものを取り入れています。20代は、おもしろいものを探していた時期でした。そこから自分流にねらいを定めアレンジしています。

佐野：音を示していたハンドサインもその一つですか？

岩井：ハンドサインを使った指導は、以前ハンガリーに行ったときに経験しました。日本でもハンドサインを使う実践は行われていますが、それだけにとられないように注意しています。ですから「ハンドサインを覚えましょう」といった明確な指導を行ったことは一度もありません。こっそり取り入れるぐらいです。それを子どもたちが、だんだんまねるようになりました。音が視覚化されるので、いいですね。

佐野：ハンドサインは音の高さだけではなく、音の動きの方向や動き方にも使えますよね。

岩井：そうなんです。手の動き一つ一つに、さまざまな意味をもたせることができます。



グループをつくる子どもたち

内唱の心も育ちます。

佐野：リズムや音価についても、「ティティ」「ターター」「シンコーペ」という言葉で表現していました。

岩井：これはコダーイを参考にしています。日本では♪♪を「タンタタ」と歌うことが多いけれど、僕は4部音符を「タン」と歌うことにずっと疑問をもっていました。4分音符が音価分きちんとのびてないように感じていたのです。

佐野：「タン」には音価がありませんからね。

岩井：そして、ハンガリーで「ターターターター」と4分音符を歌っていたのを聴いて、「ああこれだ、このように前に進んでいる感じが欲しかったんだ」と思いました。そして言葉を「ティ」と「ター」にすれば、聴こえ方も明らかに変わるし、「ティティター」と歌えば、それぞれ別の音符であることも分かります。

佐野：この他にどのような表現がありますか？

岩井：まず4分音符♪は「ター」。2分音符は「ター」がもう1拍のびたから「ターアー」。8分音符♪は「ティ」。あと付点8分音符♪は「ティム」。16分音符♪♪♪は「カカカカ」だけど言いにくいので「カクカク」。付点は「ム」。従って付点8分音符と16分音符♪♪は「ティムカ」です。一般的に使われている「タッカ」だと、僕は休符があるように感じるのです。

佐野：音楽の流れをしっかりと言葉で示していますね。

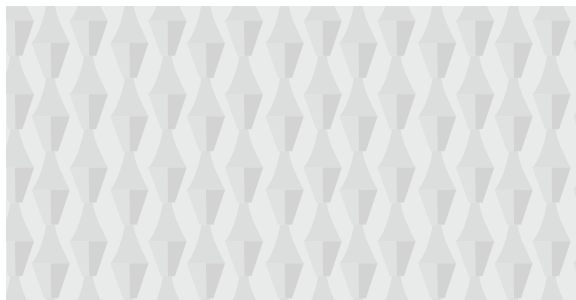


子どもたちは岩井先生のピアノの音に即座に反応し、次の活動へと移っていく

岩井：今日は久しぶりにシンコーペーションが出てきましたが、おもしろいリズムです。この方法を教えてから、リズム読みもよくできるようになりました。読譜で重要なのはまずはリズム読みだと思っています。

佐野：楽譜を見ながらきちんと歌えることは大切です。それから、先生が「6人グループつくって」と言うと、子どもたちはすぐにグループになりました。6で割り切れる人数ではないけれど、うまく7人のグループも交えてつくっていましたね。これは本来、小学生には難しいことです。

岩井：訓練しないと、グループをつくるだけで1時間もめてしまいますからね。初めてのグループづくりのとき、まずは何も言わずに見守ります。子どもが「6で割れない」と言ってきたところで「そうだね、じゃあどうしたらうまくいくかな？」と声を掛けることから始めます。するとどこかのグループが「1人こっちに入っちゃいなよ」と言う。そこで「みんな、今グループの人数が6、6、6、7になったよ。どうして7にしたの？」と聞いてみると「割れなかったから」と。そのあとは「ルールが少し変わるけど、7にしたらみんなは怒る？」「しょうがないと思います」



「よし、じゃあこれはありだね。優しさだね」という流れで進めます。ただし、いいかげんな言葉を掛けてしまうと、10人や3人のグループができてしまうので気を付けなくては いけません。優しさといっても、何でもありにするのではなく「6人にこだわったうえで7人グループをつくること」に僕は重要性を感じます。

佐野：「6人のグループをつくらうとしたけれどつまづいた、壁にぶつかった」という経験がとても大切ですね。

岩井：はい。そこには音楽を通した人間教育が存在すると思うんです。隣の子と肩たたきや握手をする活動を通して、ふだんから子どもたちは「近くの子」に慣れて、グループをすぐにつくれるようになっていきます。最初の頃は男子と女子が手をつなぐこともできませんでした。しかし、グループにしたからといって、アクティブラーニングになるわけではありません。あくまでグループは手段です。そこで仲間になったり、よく歌えている友達を見ることで自分を知ったり、隣の子と手をつなぐことによって活動が前向きになったりする。そうしたさまざまなねらいがあります。

佐野：教師主導による一斉的な授業を批判する傾向がありますが、その中でも活発な意見交換などを通して個々の学びが育っている授業はたくさんあります。逆にグループ活動でも学び合いが行われていない授業もあります。授業の在り方は多様でよくて、常に子どもの実態やねらい、教材にふさわしい学習形態を工夫する必要があります。

チャンスは「きれい」と感じた瞬間

佐野：岩井先生は一人一人に「○○さん、いいね!」と声を掛けて、よくできている子どもを、主役のようにほめていました。

岩井：学校現場は集団で動くことが多いので、どうしても全体指示が多くなってしまいます。しかし、基本は一人一人だと思うんです。一人一人がよくできれば、グループがうまくいって、グループがうまくいけば、クラスがよくなる。例えば、小学生はまだ普通に立つことすら難しいんです。僕が決めている合唱達人(5箇条*)の「しゃきっと立ち」ができている子どもに「いいね」と言うと、多くの子どもは「えっ?」と驚きます。「どうして『えっ?』と思ったの?」と聞くと、「言われるとは思わなかった」と答えるんです。音楽は自分でできているという感覚がつかめない教科だから、周りの人が言ってあげることが大切だと子どもたちにも伝えるようにしています。僕がまず一人一人、その子のよい点を伝えることによって、周囲の子どもたちも伝え方の観点を少しずつ学びます。僕はたまに1人を前に出して「どうして急に呼んだと思う?」と子どもたちに問いかけます。そうすると、「しゃきっと立ってる!」「スマイル君だ」など、合唱達人の項目を基本に考えを広げていきます。すると「語りかけていた」



楽譜を見ながら全員で『ふるさと』のアルトパートを歌う

などさらに語録も広がっていきます。

佐野：1人ずつの「主役化」ですね。声が小さくても、他のよい点をほめてもらえる。それが評価されるということです。

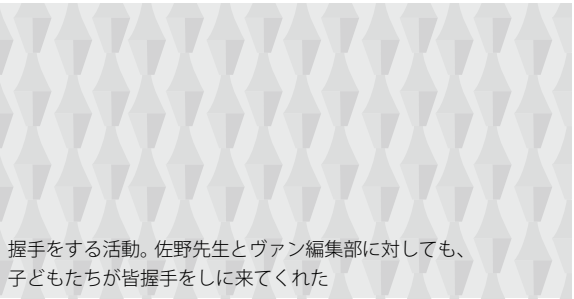
岩井：声の大きさや息の量は、一人一人もともとテンションが違うから、そこは大事にしたいなと思っています。今日扱った教材や活動はたくさんありましたが、主な指導はハーモニーについてです。教材は、適していると思ったら、少しずつ使っていきます。1つの教材でも、今日はリコーダーだけ、歌だけ、ゲームをしてみるなど、少しずつ扱っていきます。ハミングは今日、久しぶりに行いました。ハミングはきれいですし、子どもたちのやる気が少ないときでも、自分たちの美しい響きを味わうことができます。長い時間をかけてしっかり覚えるような活動はあまりしないですね。

佐野：先生の授業は一見、点で進めているようで、実は1本の線でつながっている。戦略をもって指導されているのでしょうね。ピアノ伴奏で歌っている途中、急にア・カペラにしても、子どもたちの音程は、ずれませんでした。

岩井：いちばん大変なのは、ハーモニーだと思います。『もみじ』も、子どもたちが歌うのは難しいです。

佐野：実は3度でハモるのがいちばん難しいですね。

*岩井先生が指導する“合唱達人”5箇条。
「しゃきっと立ち」「自分1身長」「スマイル君」「キラキラ目」「たてハンバーガーラップ口」の5つ。



握手をする活動。佐野先生とヴァン編集部に対しても、子どもたちが皆握手をしに来てくれた

岩井：はい、3度のハーモニーはほんとうに難しいんです。ソプラノとアルトに分かれて歌ってみると、アルトがソプラノにつられるし、ピアノでアルトの音を弾くと皆がそのパートを歌ってしまう。僕は5度のハーモニーから学ぶのがいちばんいいと思っています。そしてオクターブも大切です。人が歌を好きになる瞬間は、自分がうまくハモれたときだと思うんです。きれいですから。そして、人が「きれい」と感じる瞬間こそ、学びの大きなチャンスがあると思います。だから、あくまでハーモニーの学習では遊んでいるような楽しい活動をしたいと考えています。

佐野：美しいハーモニーをつくるためには頭声的な発声で歌う必要があります。1人ずつの声があまりに違うとハモれません。

岩井：そうなんです。音程が合っていてもハーモニーの美しさは味わえません。美しい音という、ほんとうにおいしい味を噛みしめるためには、子ども自身が声の出し方を知る必要があります。そのための頭声的な発声だと思うんです。

佐野：音程もずれませんね。

岩井：そのように、子どもたち自身が気付くのも学びですね。僕たち教師は歌唱の

学びをきちんと伝える使命があります。元気な声もいいけれど、せっかくならハーモニーの美しさを味わって卒業させたいなと思っています。

佐野：ハーモニーの美しさを感じ取ることができれば、アルトの大事さにも気付きますよね。アルトが一生懸命声を出さないとソプラノも響きませんから。

岩井：そうしてハーモニーの美しさにはまった子どもは、アルトを歌うことも好きになるんですよね。

役割は「無意識の意識化」

岩井：音楽科の活動は、機転を利かせることにつながっていくと考えています。

佐野：機転を利かせるというのは、考えることでしょうね。「思考力」というと、じっと考えなければいけないと思いがちですが、実はそうではありません。その場で感じたことや、ひらめいたことをとっさに考える力に結び付けられるといいですね。

岩井：考える瞬間って不意に訪れませんか？ 世の中は予定どおりに進んでくれないから、その場その場で考えなくてはなりません。例えば今日、この「授業者に訊く」の

取材で数名の大人が来た。そのとき子どもたちが「仲間に入れたら楽しいかな?」「大人だけ一緒に活動してくれるかな?」と自ら考えて行動してほしい。それができたら、将来1人で海外に行ったとき「あの人に話しかけたら分かってくれるかな?」と考えて行動することができるでしょう。その行動力こそ、生きた価値があります。

佐野：考えることによって、感覚も育つのもかもしれませんね。

岩井：そうですね。僕たち教師の役割は「君は、価値のあることをしていたんだよ」と、無意識だったものを意識化することだと思います。そこに自己肯定感をもってほしいんです。

佐野：子どもたちが「こういうことをすれば、岩井先生が認めてくれる」と理解できていることはすばらしいですね。握手をする活動では、取材に来た私たちのところにも、皆握手をしに来てくれました。

岩井：そうですか。子どもたちは握手をしに行っただけですね。あの活動は強制的なものではなくて、「行けるなら行こうね」と伝えています。でも、そういうときにパッと行動できる子どもになってくれたら嬉しいなと思うんです。

授業者に訊く—2



各グループを回り、拍に合わせて演奏できるよう指導する

福岡市の中心部にある大濠公園に程近い、福岡教育大学附属福岡小学校を訪ねました。お囃子のリズムと旋律づくりに取り組む4年生の授業をご紹介します。各自でつくった旋律をつないで、グループで1つの音楽にする活動です。子どもたちの意欲を引き出す授業の工夫について、お話を伺いました。

授業者：倉橋慎二（福岡教育大学附属福岡小学校） 聞き手：岩山恵美子（平成音楽大学）

本時の授業の位置付け

本時は、「おはやしのリズムやせんりつで遊ぼう」の第3時です。前時に、お囃子のリズムに合わせて各自が旋律をつくりましたので、本時では、各自の旋律をつないでグループで演奏をします。つなぎ方の工夫により、思いや意図を表現できるように取り組むとともに、意欲的に演奏したり、お囃子の旋律のリズムや音階の楽しさなど、感じたことや気付いたことを進んで話し合ったりすることができるようになります。

授業の流れ

	学習の内容、学習活動	指導上の留意点
導入	○ 前時に各自でつくったお囃子の旋律を演奏したり、複数のつなぎ方の違う複数の旋律を聴いたりする。 ・ 旋律のつなぎ方による、曲想の違いに気付く。	・ 旋律のつなぎ方の違いによって、曲想が変化することに気付かせるために、つなぎ方を変えた2種類のお囃子の旋律を比較提示する。
展開	○ グループで、各自がつくった旋律をつないで演奏したり、表現したいお囃子になるようにつなげ方を工夫したりする。 ・ つなぎ方の違いによって、表現したいお囃子になっていることを捉える。 ○ グループでつくったお囃子を全体で聴き合う。 ・ グループでつくったオリジナルのお囃子を、地のリズムや拍に合わせて演奏できるようにする。	・ 思いや意図をもって、グループで旋律のつなぎ方を工夫することができるように、ホワイトボードにリズムカードやネームカードを貼った思考ツールを提示する。 ・ 拍に合わせて演奏することができるように、地のリズムをたたいて、それに合わせて演奏できるよう指導する。
まとめ	○ 感じたことを伝え合う。 ・ 工夫した旋律やリズムと曲想との関わりに気付く。	・ 思いや意図の実現を実感するために、振り返りの場を設定する。



佐野先生と子どもたち



佐野靖先生と岩井智宏先生



豊高啓司 先生
福岡教育大学附属福岡小学校 校長

音楽づくりを通した深い学び

子どもたちの思いを大切にした音楽づくり

岩山：今日は子どもたちが自然体で取り組んでいる姿が印象的でした。リコーダーを使って旋律づくりをしていましたが、黒板に「音階マップ」の図が掲示してありました。



○いわやま・えみこ
平成音楽大学教授。熊本大学教育学部音楽科卒業（教育学士）。熊本県内の小・中・養護学校において33年間に渡り音楽教育に携わる。その間、熊本県小学校教育研究会音楽部会の常任理事・事務局長、全日本合唱教育研究会熊本県支部副支部長、熊本県音楽教育研究会顧問として後進の指導に努める。熊本県器楽合奏コンクール最優秀賞・金賞・審査員特別賞、NHK全国学校音楽コンクール合唱の部熊本県大会銀賞、熊本県器楽合奏コンクール特別表彰、熊本県教育功労者表彰受賞。



旋律のつながり方による曲想の違いを、先生の演奏を聴いて確認する

倉橋：前時はこれを手がかりにして、2小節のお囃子の旋律づくりに取り組みました。

岩山：旋律づくりをするときに、気を付けられたことはありますか？

倉橋：子どもたちには、導入としていろいろなお囃子の音楽を聴かせ、聞こえたリズムを1つずつ「こんなリズムかな」と提示して、リズムだけに注目させるようにしました。その後、リズムを選んで各自のカードに記入し、それに旋律を付けるため、音階マップを参考にして音を当てはめながら実際にリコーダーで音を出してみるという手順で行いました。「なんかおかしいぞ？」などと言いながら、子どもたちは試行錯誤しつつ旋律をつくっていました。

岩山：子どもたちが実際に音を出しながら練習しているのを聴いていると、カードに書かれている4分音符や8分音符のリズムではなく、付点のリズムで演奏している子どもがいました。このカードは書き換えることはできないのですか？

倉橋：前時に書いたものをラミネートしているので書き換えはできません。ただし、試行錯誤しながら「ここはリズムを変えたい」「音を変えて1つの流れにしたい」といった意見も出るかなと予想していたので、真っ白なカードも用意していました。しかし、子どもたちの様子を見ると楽しそうに活動していたので、それを与えてさらに

広げるよりも、まずはきちんと1つの音楽をつくって達成感を味わってほしいと思い、今回は提示しませんでした。

岩山：子どもたちは、頭の中では新しいカードを想像していたのかもしれませんが。今の子どもにとっては、シンプルなリズムだけではなく付点やシンコペーションのリズムも身近なので、ついそのようなリズムになったのかなと思いながら聴いていました。

倉橋：今回は「おはやしのリズムやせんりつで遊ぼう」という題材です。遊びながらお囃子の旋律や日本的な音階に慣れ親しむことを大切にしたいかったので、遊びの中で提示したリズムとは違うものに変化していくのもよいと思い、取り組んでいました。私が音楽づくりで大切にしたいのは、子どもたちの思いです。ゼロからイチにする楽しさがあるので、そこは子どもに任せて、こんな音階を使ったりこんな旋律を使ったりすれば日本的な音楽になるんだと気付くことができるような学習になればいいと思っています。

岩山：何となく、ではなく、子どもたちが意図的にお囃子の雰囲気イメージしているのであれば、それでもいいということですね。先生がおっしゃる「子どもたちの思い」とは、あくまでも子どもたちがもつ「お囃子」の漠然としたイメージであって、それが跳びはねていたり、しずしずとした感じがしたりするといった具体的なイメージではないということでしょうか。

倉橋：今まではテーマを決めて、そこに向かって音楽づくりをするという手順でしたが、今回は遊びながら感じていく、ということを大事にしたいと思いました。グループ内で子どもたちの「お囃子」に対する



黒板の掲示。「音階マップ」やお囃子の写真など

イメージや解釈がそれぞれ違ってしまいかもしれないという不安はありましたが、今回はとにかく音を出してみ、その中で自分たちが感受したことを通して、結果としてこう表現した、という感じになればいいと思いました。加えて、私自身がちょっと挑戦してみたかったという気持ちもありました。

岩山：手ごたえはいかがでしたか。

倉橋：いろいろな意見が出てきました。固定概念なく取り組めるので、この方法も有効だと思いました。ただし、もう少し聴き合える環境が必要だったかなと思いました。



旋律のつながり方について、アドバイスを

さらなる表現の工夫

岩山：本時は、各自でつくったお囃子の旋律をグループでつなぐ活動でしたが、教師から何の支援もなく「はい、つなぎなさい」と指示を出してしまったら、それこそ4年生であれば、全く音楽とは関係ない理由で順番を決めてしまう可能性もあると思います。そうならないように、どのような手だてをされましたか？

倉橋：まずは、本時の導入でつなぎ方を変えた2種類のお囃子の旋律を比較する活動を取り入れ、各自の考えた旋律のつながりによって曲想が変わるということを捉えるようにしました。また、ホワイトボードで簡単にカードの並べ替えができるようにしました。試行錯誤することができますし、「こうじゃない？」「あじゃない？」と言葉にせずやりとりをすることも、十分に音楽的な言語活動になると思っています。音や音楽が話の中心になればよいので、カードを並べ

替えるという手だてによって、子どもたちは表現するリズムや旋律と自分たちの思いとをつないでいくのではないかと思います。



○くらはし・しんじ
福岡教育大学附属福岡小学校 教諭

岩山：実際にカードを動かしながら見てリズムや旋律の流れを確認することができるので、子どもたちは思い描いているイメージともリンクさせながら試行錯誤していました。でも、もしこれがなかったら、イメージをもちにくく、混乱したかもしれません。4年生にとっては、たいへん分かりやすい手だてだったと思います。

倉橋：ありがとうございます。

岩山：あるグループは、最初の2小節を「最初っぽい音」、真ん中の4小節を「日本風な感じ」、そして最後の2小節を「終わるような音」と書き込んでいました。それぞれは短いフレーズですが、旋律のイメージを捉えていたので、子どもたちの感性はすばらしいと思いました。

倉橋：その感性を大事にしたいですね。

岩山：中には、強弱について考えているグループもありました。

倉橋：そこまで考えると、私も想定外でした。



岩山：強・中・弱とホワイトボードに書いてあったので、「これはどういうこと?」と子どもに聞いてみたところ、「最初が強く、次は中くらいに、そして弱く」という答えでした。デクレシェンドという言葉は出てきませんでしたが、だんだん弱くという表現をしたかったようですね。ワイワイガヤガヤとしたお囃子の雰囲気ではなくて、お祭りの終盤でだんだんと人が去っていく様子をその子なりに考えたのかかもしれません。子どもたちの思いをもっと詳しく聞きたいと思いました。

倉橋：子どもたちがカードを並べ替えるときや、ここは強くしたいなどと意見を出すときは、思いがあって工夫しようとしています。その思いを、実際に音楽をつくったというだけではなく、これを表すためにこう工夫した、つまり、曲想と音楽的な要素とをつないでいくことが大事だと思います。

岩山：「春のイメージを目指す」と具体的に書いているグループもありました。

倉橋：明るいイメージがあったのかもしれませんが。実際に感じたことからグループでテーマを決め、わかりやすく言葉で表現したのでしょう。次の時間では、この「春のイメージ」に、強弱や表現の要素、さらには奏法や音色の工夫も入ってくると思います。

岩山：そうすると、つくったお囃子がより音楽的になり、豊かな表現につながっていきますね。各グループがどう変化していくのか楽しみです。

音楽づくりで技能の習得

岩山：グループで練習をしているときに、先生が各グループを回り、太鼓で拍を示しながら指導されていました。自分たちで試行錯誤はするけれど、その中でも基礎的なことはきちんと身に付けさせようということですか?

倉橋：技能も高めていかなければならないので、グループを回りながら適宜指導を行いました。ただ技術を指導するのではなく、「拍に合わないな」「なんかうまくいかないな」と思ったタイミングでアドバイスをするなど、子どもの様子から指導するタイミングを見逃さないようにしています。「技能を習得して表現を工夫しましょう」ではなく、表現と関連させながら技能を高めていくべきだと感じています。

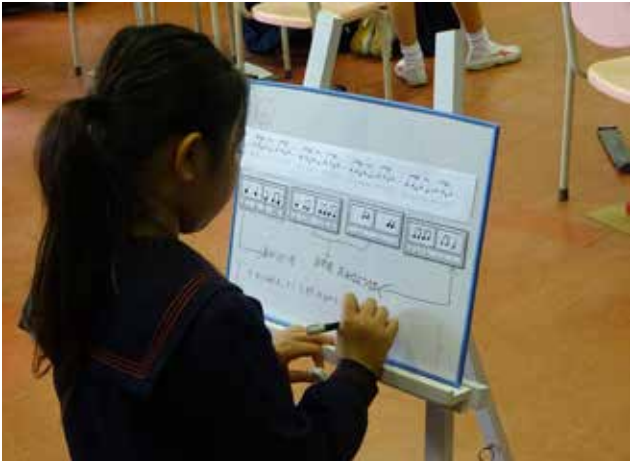
岩山：新学習指導要領でも、「表したい音楽表現をするために必要な技能」と記されていますので、今までのように技術が向上したらこの曲を演奏する、というのではないですね。今日の取り組みは、例えば「高いレが出ないから練習したい」という思いから技能の習得につながるという、新学習指導要領の考え方に即していると思いました。

倉橋：音楽の授業で音楽を好きになる子どもたちを育てたいと思っています。歌唱や器楽だと「私にはできない」と思ったところから、苦手意識

が芽生えがちですが、この音楽づくりは個人の技能に合ったところからスタートすることができます。例えば今日の授業で、2分音符で「ラー」と2拍のばす音の旋律をつくったA君は、リコーダーが苦手なのですが、2分音符と自分がいちばん得意なラの音を選んでいきます。それでも、グループ活動によって1つの曲になるので、「リコーダーは苦手だけど、1つの音楽をつくることができました!」という達成感や満足感を味わえるなと思います。そういう意味で、音楽づくりなら必要な技能を身に付けながら学習を進めることができます。

岩山：こちらが言わなくても、得意な子は複雑で難しいことに自分からチャレンジしていきます。ちょっと苦手だなという子は、自分のできるところを一生懸命に練習しながら少しずつレベルアップしていける。歌唱や器楽よりも、音楽づくりのほうが技能の習得に自由性があります。

倉橋：先ほどのA君の旋律が入ることによって、曲に終わりの感じが生まれ、彼の存在感も出ています。今日のA君はすごく



考えた旋律を説明できるよう、イメージをホワイトボードに書き込んでいる



どのグループも、発表するために積極的に手を挙げる

よい表情をしていましたし、グループで発表するときにもずっと手を挙げていました。いつもは音楽が苦手で下を向きがちなのですが、彼なりに今日は学習に参加できていたように思いました。

「主体的・対話的で深い学び」の実現

岩山：ところで、新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」という3つの視点が示されました。今日の音楽づくりの授業では、その3つについてどういうところを大事にされましたか。

倉橋：まず、深い学びに導くためには、主体的で対話的であることが必然だと思っていますので、最初に比較活動をさせたり、モデルを提示したりすることで、主体的な活動につなげる手だてとしました。そして、グループ活動をすることで必然的に生まれる対話を大切にしながら、自分が思っていることや感じたことと実際のリズムとで、知性と感性がつながり、深い学びになるのだと思います。今日を振り返って、最後に「今できた旋律の名前を考えてみよう」などの発問をしてもよかったなと思いました。

岩山：子どもたちが試行錯誤した先に、どういうお囃子を表現するのかというゴールが見えませんでしたでしたが、振り返りの場を

設けたことでより深められたと思いました。「順序を入れ替えるとより演奏しやすくなって、より日本風な感じが引き出された」と発言した子どももありましたね。リズムと旋律の違いによって、日本風な感じが深まるという音楽の広がりを感じていたのは素晴らしいことです。それこそ感性の深まりだと思いました。

倉橋：他の子の振り返りでも、「次はこんなことをやってみたい」「こんなことをしたらどうなるだろう」という意欲が見られたので、次の時間でいろいろ試したいと思っています。

岩山：それを積み重ねることで学習がより深まっていきますね。

音楽科は素晴らしい!

岩山：この取り組みは、子どもたちの感性に訴えるところをより大事にしたということですが、今日のようにのびのびと自然体で活動していたのは、先生が子どもたちの深い思いを大切にしていたからだと思います。

倉橋：表現領域は座学では学べません。しかし、音楽室なら自分がふだん出せない内面を見せたり表現したりすることができます。もちろん人に迷惑をかけてはいけませんが、言葉や音などを使いながら、にぎやかでのびのびとした空間で学ぶのもよいと思います。

岩山：私も、子どもたちが本音で自分の心を開くことのできる教科は、音楽だと思っています。図工や美術の場合はテクニックがないとなかなか伝わりませんが、音楽の場合は少々声が地声になったとしても、自分の思いを音や声で、あるいはリズムで容易に表現することができます。学習指導要領が改訂される度に、授業時数が減ってしまうのではないかと心配していますが、音楽科は子どもたちにとって大事な教科なのです。

倉橋：私も同感です。音楽科の目標を他の教科と比べると、活動が最初に記されているのは音楽科だけです。また、内容についても「思考力、判断力、表現力等」が先に挙げられているのは音楽科ならではのですね。それらを育てるという意味でも、音楽活動は大切です。

岩山：今日の活動は、まさに「思考力、判断力、表現力等の育成」ですね。音楽科で行っている日頃の子どもたちの活動です。子どもたちが自然と自らのレベルで思考し判断しながら、自らのペースで少しずつ知識や技能を高めていくことができる、それが音楽という教科だと思います。

倉橋：素晴らしい教科ですね。私も指導していて楽しいです。



岩山恵美子先生と倉橋慎二先生

音楽科の特質に応じた言語活動とは？

「主体的・対話的で
深い学び」と言葉

特集の後半は、授業実践と言葉に関わる内容をお届けします。授業を充実させるためには、教師が音楽科でどのように「言葉」を扱い、「言語活動」を位置付ければよいのでしょうか。「ヴァンvol.33～35」の特集「これからの学び」でお話を伺った副島和久先生に、授業における言葉の役割や実践のヒントについてお話しいただきました。

「言語活動」は“手だて”

最初に押さえておいてほしいのは、言語活動は“手だて”であって“目的”ではないということです。「言語活動の充実」について言われ始めた頃から、「言語活動を位置付けなくてはいけない」という意識ばかりが先走って、そのこと自体が“目的”となってしまっている授業もいくらか見受けられるようになりました。あくまでも、音楽科の目標をよりよく実現するための手だてとして、言語活動を充実させるのであって、そこが「言語活動」を捉える際の大切なことだと思います。「何のための言語活動か？」ということをしかりと考え、「活動あって学びなし」といったようなことにならないようにすべきです。

音楽科の特質に応じた言語活動

子どもたちが音や音楽と出会い、知覚・感受する(聴き取る・感じ取る)ことが授業のスタートです。知覚・感受したことを踏まえて、音楽表現を創意工夫したり、音楽のよさや美しさを味わって聴いたりする際に、自分たちの言葉でやり取りをして、そのとおりになっているかを実際に音で確かめながら学習を展開していきます。このことが「音や音楽と言語の両方によるコミュニケーション」であり、「音楽科の特質に応じた言語活動」の最も本質的な部分です。

例えば、歌唱の授業において、「曲の山に向かって徐々にクレシェンドしたい」と考えたことを、実際に子どもたちが何度も歌って確認したり、鑑賞の授業において、ある子どもの「フルートの演奏する旋律が爽やかな風を思わせる」という感受に対して、その部分の音楽をもう一度聴き、他の子どもたちも「確かにそう感じる」と共感したりすることによって、音楽科の学びは深まっていきます。

「音楽科の特質に応じた言語活動」を充実させるポイントは、

音楽を伝える言葉が、子どもたちにとって活用できる「共通の言語」となっていることです。そのためには、音楽用語及び記号の名称や意味を知るだけでなく、実際の音楽活動を通して、どのような働きがあるのかを実感できるようにすることが大切です。例えば「*pp*」の意味を「とても弱く」と言葉で理解するだけではなく、「『夏の思い出』の〈水芭蕉の花が“咲いている”〉」の部分で歌うときのような感じ」といったように音楽を通して理解し、そのことを他者と共有することで、言葉によるコミュニケーションも一層豊かなものになると思います。

「音楽科の特質に応じた言語活動」の充実を図るためには、教師もそのための導きを丁寧にしなくてはなりません。音楽から感じるものは、子ども一人一人のこれまでの生活体験や音楽学習の経験によっても異なります。また、子どもたちが聴き取ったことや感じ取ったことを的確に言葉で伝えるのは簡単ではありません。だからこそ、教師が子どもとのやり取りを丁寧に行うとともに、子どもたちどうしの関わりを豊かにして、他者の多様な感性に触れることができるようにしてほしいと思います。そうすることで、一人一人の感性も深まるのではないのでしょうか。

教師がよき理解者となる

まずは、教師自身がその子どもの言ったことをきちんと理解しているかどうかが重要です。とある学校で創作の授業を参観させてもらった際に、ある子どもが、作品をつくるときに工夫したこととして「リズムをよくしました」と発言しました。授業の中ではそれ以上のやり取りはなかったのですが、授業後にその子に「リズムをよくしたってどういうことだったの？」と尋ねると、「タッカのリズムをたくさん使った」と教えてくれました。「付点のリズムをたくさん使ったんだね。どうして？」と続けると、しばらく沈黙をしたあと、

ぼつりと「楽しい感じにしたかったから……」と答えてくれました。授業の中で、もう1往復か2往復、教師との言葉のやり取りがあったら、その子どもの真意を学級の人々と共有できたのになあ、と思いました。

授業の中ではこのようなことが往々にしてあります。まずは教師自身が、丁寧な言葉のやり取りを通して子どもの伝えたいことをしっかりと理解することが大切です。そして、そのやり取りを周りの子どもが一生懸命に聞くことで、「付点のリズムがたくさん使われていると、確かにわくわくした感じがするなあ」といったように理解が深まり、学級全体で学びが深まっていくと思います。

発達の段階や学習経験にもよりますが、子どもたちの発言には曖昧な部分がありますので、教師と子どもが少なくとも2往復ぐらいは言葉のキャッチボールをすることが必要だと思います。その中で、例えば「楽しい感じがしました」という子どもの発言に対しては、「『みんなで遠足に行ったときのような楽しさ』などのように、『～のような』というたとえを使うと、友達にもどんな楽しい感じなのかがよく伝わるよね」などと、子どもが感じたことをより豊かに言葉で表現できるような教師の助言があるとよいでしょう。「まるで○○のような感じ」などのように比喻を用いたり、「キラキラした感じ」などのようにオノマトペを用いたりして自分のイメージを表現するのは、感受したことをより豊かに言語表現する方法として有効です。

対話的で深い学び

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学びの実現を図る」ということが全ての教科で新たに示されましたが、一方で、音楽科では「他者と協働しながら」ということもこれまでと同様に大切にしていきたいですね。「協働」は音楽科における大切なキーワードであり、新学習指導要領の中でもたくさん用いられています。

「他者と協働しながら」ということは、音楽科ならではの学習の姿であるといってもよいと思います。

気を付けなければいけないのは、グループ活動やペア活動などの「対話する活動」を位置付けたからといって、それが必ずしも「対話的な学び」になっているとは限らないということです。子どもが必然性を感じないペア活動や、活動の進め方やゴールが見えないままに、ただ伝え合っているだけのグループ活動からは何も生まれません。「何のためにお互いの考えを伝え合っているのか」「伝え合ったあとに何をするのか」ということが明確になっており、子どもたち自身が伝え合うことに意義や必然性を感じている。そのうえで、「自分の考えを伝えたい」「友達の考えを聞きたい」と強く思い、対話する活動を楽しんでいる。このような学びになることがすばらしいのではないのでしょうか。その結果として、それぞれの子どもの中で、自分の気付きや考え方、感じ方が広がったり、深まったりしたかどうかが重要です。

例えば、まだ漠然としている自分の考えを、友達に納得してもらおうと何度も説明したり、友達からの質問に答えたりしているうちに、自分の考えが確かなものになったり、深まったりする。また、友達が聴き取り、感じ取ったことを聞いたあと、あらためて音楽を聴くと、これまで聴こえなかった旋律やリズムに気付き、自分だけでは見い出せなかった「知覚・感受」があることを知る。このように、他者との関わりを通して、考え方や感じ方が広がったり深まったりすることが、「対話的で深い学び」の本質であるといえます。

「主体的・対話的で深い学び」は一体的に実現が図られていくものなので、当然、「対話的で深い学び」の前提として、子どもの「主体性」を喚起することも大切です。何より、子どもと音楽との出会いを大切にすることで、音楽を聴いた子どもの心が動く瞬間があれば、「その思いを伝えたい」という子どもの気持ちが「対話的で深い学び」をより豊かなものにしてくれるでしょう。



○ 副島和久（そえじま・かずひさ）
佐賀県内公立中学校、佐賀大学(文化)教育学部附属中学校、佐賀県教育センター等での勤務を経て、平成30年度より佐賀県唐津市立伊岐佐小学校校長、佐賀県小・中学校音楽教育研究会副会長。



「楽譜」を読むということ

教育センターに勤務していた頃に、あるセンター所員の実践研究として、小学6年生の合唱の授業に取り組む機会がありました。その中で、子どもたちに表現の工夫について考えたことの根拠を問うと、何とその8割以上が「歌詞」だったということがありました。「『強く 強く』という歌詞なので、『*f*』で歌うとよい」といったようなものです。音楽の特徴について考えたり、自分たちが歌っている曲の楽譜をきちんと読み解いたりした経験がほとんどないことがその原因であると思いました。その後、授業の中で、旋律の特徴や、旋律と旋律との関わり合いなどに注意して歌ったり、そのことを楽譜で確かめたりするような活動を取り入れると、子どもたちは楽譜の中に根拠を見いだして、表現の工夫に取り組むようになっていきました。

「読譜」では、楽譜を見て正しい音高とリズムで歌えるということはもちろん、「音高がだんだん高くなって、上行する旋律だな」「8分音符が続いて、スピード感がある旋律だな」といったように、自分が聴き取り、感じ取ったことを楽譜の中で確かめることがとても大切であると思います。聴覚と視覚を関連付けて音楽を捉えることで、音楽に対する理解はより深まります。そのうえで、「*f*」と書いてあるから強く歌うというのではなく、「なぜ、作曲者はここに『*f*』と記したのかな？」といったように、楽譜を通して作曲家の意図に思いをはせることができるようになるのとよいですね。子どもたちの言語活動を充実させるために、「楽譜」はとても重要なアイテムになると思います。

昨今では、デジタル教科書なども普及し、楽譜を拡大コピーしなくても電子黒板などで容易に大きく映し出すことができます。このようなICT機器も駆使しながら、全ての子どもにとって、楽譜がもっと身近なものになればよいと思います。楽譜を囲んで、音楽について語り合っている子どもの姿はすてきだと思いませんか。

音楽科教育において、言葉が果たす役割とは

音楽科においては、「知覚・感受する」、つまり、「聴き取る・感じ取る」ことが学習の基盤となっています。したがって、知覚した(聴き取った)ことをいかに分かりやすく正確に伝えるか、感受した(感じ取った)ことをいかに豊かに伝えるかということがとても大切になります。そのため、言葉の果たす役割がとても大きいということは自明の理であると思うのです。だからこそ、音楽に関わる語彙を豊かにし、言葉を磨くことが求められているのです。そして何より、音楽の学習を通して、言葉で伝え合うことが楽しい、言葉で表すことでさらに音楽と真剣に向き合うことができる、という子どもが増えてほしいですね。言葉は、音楽科教育をより充実したものにするための大切なツールであると思います。

教師は、まず自分の言葉を磨くことが大切です。教師は子どもにとってのモデルとして存在します。教師が①どのような言葉を発するのか、②子どもたちの言葉を磨き、豊かにするためにどのように働きかけていくのか。この2つがうまく作用することで、音楽科教育は一層充実したものになると思っています。

言葉は、とても便利で使いやすいツールです。けれども、言葉で伝えることを突き詰めていくと、音楽の全てを言葉では言い尽くせないのではないかと限界を感じ、「やっぱり音楽はすごい!」ということに気付くのかもしれません。「言葉では伝えられないものが音楽にはある!」というのがロマンティックでいいですよ。知性と感性が融合する芸術教科であるからこそ、言葉を大切に使いながら、音や音楽によるコミュニケーションを基盤とした音楽科独自のよさを実感できるようにしたいですね。



ここが気になる！ 音楽科授業での教師と子どもの言葉 前田美子先生を迎えて

本特集の最後は、「音楽科の授業」をテーマにした座談会です。東京都内の小学校に勤務されている3人の先生がたにお集まりいただき、前田美子先生も加わって、指導の際に悩んでいることや気になっていることなどについてお話しいただきました。話題は、言葉の選び方から指導の進め方、ワークシートの使用のポイント、教材の展開方法、子どもたち一人一人のよさを引き出すための教師の在り方に至るまで、多岐にわたりました。

縣 麻衣子先生(世田谷区立祖師谷小学校 主任教諭) 後藤朋子先生(日野市立七生緑小学校 指導教諭)
永網拓人先生(目黒区立東山小学校 主任教諭) 前田美子先生(全日本合唱教育研究会 副会長)

授業と言葉

教師自身がどんな言葉で 伝えているか

永網: 子どもたちから「思いや意図」を引き出す場面がよくありますが、どうしても国語的に過ぎちゃって。話し合ったり子どもたちの意見をまとめているうちに、音楽する部分がどんどんなくなってしまふんです。

縣: ワークシートも言葉で表しますよね。ときおり「この子がこんなふうにいるんだ!」と意外な面を感じて驚くこともあるんです。歌やリコーダーなどでは目立たない

子が、とてもよい意見を言って、それをみんなで認め合えるのは、いいなとは思っています。

後藤: 書きたいとか、こう話したいとか、子ども自身にその気持ちがあふれて初めていい言葉、文章が生まれると思います。歌ったり鑑賞したりして音楽が心の中に流れてきた結果、言葉になることが大事なのかな。永網: そうですね。

縣: それはすごく分かります。

後藤: 自分で納得のいく授業ができなかったときは、ワークシートを書かせないんです。「ここに書いてあることは今日できなかったね、

ごめんね」と言って。無理やり書かせても形だけのことになるので。子どもたちは国語や社会の時間にすごく書いてますよね。同じように音楽の授業で書かせるのは違うかなとも思うのです。

前田: 書かせること自体はいいと思うけれど、その子らしい文章や言葉がほしいですよ。そのためには、やっぱり先生自身がどういう言葉を使っているか、どんなふうに音楽をしようとしているのかが大事だと思うの。子どもが型にはまった言葉で表現させないためには、先生自身がもっと自由な言葉で伝えることが必要でしょうね。

あるなと感じるんですね。

永綱：確かにそうですね。そうしたときに
関わりを感じます。

後藤：音楽づくりなど、ずっと話しながら
活動していますよね。音楽づくりはとても
有効的だと思います。教科の中でも、私は
音楽がいちばん対話的で、人との関わりが
強いと思います。

「えっ!」と感じる子どもの言葉

縣：子どもたちからの言葉に対して、もう
少し意識を高くもちたいです。

前田：子どもと言葉について考えると、低
学年の子どもたちの言葉はいつもすてきだ
なと感じますね。何のてらいもなく、そのま
まストレートに表現してくれる。その
「えっ!」と感じる言葉を、私たち教師は拾
わなきゃいけないと思うんだけど、「そうだ
ね」で流しちゃうことがある。低学年の子ど
もの言葉を大事にしていくと、かなり違っ
てくると思うんだけどね。

永綱：子どもの潜在能力は高いということ
でしょうか。

前田：そうです。それが感性だと思います。

『チューリップ』を歌うときに「今のは何色
だった?」と聞くと、子どもは「僕は赤で歌
いました」とか「ピンクで歌った」と言っ
てくれる。そうすると同じ『チューリップ』でも
違うじゃない。僕の『チューリップ』。そうい
うもっていき方が大事じゃないのかな。

永綱：子どもの本心が出るからこそ、歌の
表現も変わってきますよね。前田先生は音
楽のことを直接的に言わないですよね。でも
言葉の感じだけで子どもたちが理解して、
音楽的な表現に結びつけてしまうんですよ
ね。

縣：表現がすっかり変わりますよね。

前田：指導していると、子どもたちからお
手紙をもらうことがあるんです。この間、4
年生の男の子からすごくいいお手紙を

気持ちがあふれて、
初めていい言葉、いい文章
が生まれると思います。
子ども自身がさらけ出して
くれるかどうか、
ほんとうに大事ですよ。

○後藤朋子(ごとう・ともこ)
日野市立七生緑小学校 指導教諭

永綱：一字一句この文章は適切かどうか
をチェックしなければいけないようなところ
があって。

前田：でもそういう授業をあなたはしてい
ないじゃない。もっと楽しいわよ。役者と
して自分を表現している……。

永綱：指導案はそれぐらい完璧でないと今
の時代はいけないのかなと思っていました。

前田：子どもの気持ちがあって初めて響き
になり、音楽になるんです。

音楽科における「対話的」とは?

縣：「対話的」ということを意識して、1時
間の中に1回は近くの2、3人やグループ
で話し合いをさせていますが、意味のない
話し合いをしても仕方がないことに気付
きました。対話の相手は、子どもどうしだ
ったり、音楽だったり、自分自身、教師だ
ったりしますよね。まだ勉強中で、とても
悩みます。

永綱：対話って、別に友達と話さなきゃい
けないわけじゃなくて、この作曲家はなぜ
このように作曲したのだろうと、作曲家と
の対話であってでもいいわけですよ。

前田：いいぞいいぞ。とってもいい発想で
す(拍手)。

永綱：視点が変わってもいいのかなと思
います。

ワークシートから
その子の意外な面を感じて
驚くこともあります。
いい意見をみんなで
認め合えるのは、
すごくいいなと思っています。

○縣 麻衣子(あがた・まいこ)
世田谷区立祖師谷小学校 主任教諭

子どもが言えないといけないような流れも
あるんですよね。

永綱：そうなんですよね。

後藤：根拠をもって、という部分ですよ。
作曲家に聞いたとしても「どうしてでしょう
ね」ということもあるような気がする(笑)。

“前田語”で書かれた指導案

後藤：私、前田先生の手書きの指導案を
幾つか持っているんですよ。先生が退職さ
れる前に、武蔵野市立第五小学校に何回
か行ったかな。

永綱・縣：見たかったです!

後藤：すばらしい授業でした。先生が教え
ていらした頃も、ワークシートを書かせま
したか?

前田：書かせている先生はいたんじゃな
いかしら。

後藤：前田先生はされていなかったんで
すか?

前田：しない。

縣：なぜ書かせなかったのですか?

前田：逆に私が書いてました。子ども一
人の記録カードを作って。この子は4年
生のときにこんなだったとか、スポーツが
得意だったとか、そんなことを書いておく。

そうするとその子が何か発言したときに、
いろいろな背景が見えてくるわけですよ。

後藤：前田先生の指導案も前田先生の言
葉で、“前田語”で書いてあるんです。優
しい言葉なのですが、自分はこんな授業を
して子どもを育てたい、というのが見える指
導案なんです。

前田：授業はお料理のように、決まった流
れの中だけで行うものではないんじゃない
かなー。クラスの特徴と子どもの特徴をき
ちんと捉えると違ってくると思う。私が教材
をしっかり研究しようと思うようになったの
は、こうした実感が影響していると思うの。

永綱：そうなんです。

前田：1学年6クラスを教えたことがあり
ました。今日は何曜日だっけ? というぐら
い大変で、どうしようかと考えたとき、6ク
ラス全部違う指導案でいこうって。そうし
たらすごく楽しくなったのね。

永綱：私は今5クラスですが、同じことを
指導していると3クラス目ぐらいで自分の
テンションが下がり、それが子どもにも
移ってしまっ……。

縣：指導案を幾つも作成するなんて、自分
の発想にはありませんでした。

永綱：指導案って共有物のような気がし
て、自分で分かるだけではダメだと思っ
てました。他の先生が見たときに分かるもの
を作らなきゃ、という思い込みがすごく
あって、苦しいです。

前田：役者の台本みたいね。

永綱：子どもたちに「何か言わなきゃ」と
は思わせたくないです。

縣：ワークシートにしても、書くことが目
的ではないですよ。

後藤：やっぱり子どもたちの実感が伴うこ
とが大切かな。合唱曲の途中で転調したと
きに「広がった」という言葉を使って伝え
たことがあるんです。でも、子どもたちが
ほんとうに「広がった」という言葉に共感
するまでにだいぶ時間がかかりました。音
楽とともに子どもが体感できて初めて、こ
れって調が違うことなんだということが分
かったようです。

気持ちがあって、音楽になる

前田：「*㍿*だから強く歌おう」「*㍿*は弱く
ね」「クレシェンドだからだんだん大きく
しょうね」っていうのは順序が逆だと思わ
ない?

永綱：どういことですか?

前田：音に対して子ども自身がどう感じる
か。ピアノが鳴っているから歌うのではな
くて、「こう歌いたいんだ!」という気持ち
にあふれさせることが大事なんです。そう
すると子どもは「ここがいい!」とか、「好
き」とか「どうしたい」という気持ちを出
してくる。そこで「どうして?」「なぜ?」
って突っ込めるといいんですよ。

縣：ピアノを習った習慣から「ここは*㍿*」
「ここは*㍿*」というふうに育ってきたので、
教師になりたての頃、まさにそういうふう
に授業をやっていたんです。いろいろな先輩
の授業を見せていただいて、違うんだ、こ
れじゃいけないんだなと思って、今は*㍿*や
*㍿*などの記号ありきではなく授業をするよ
うにしています。今思うと、とても恥ずかし
いんです。

後藤：でも今は「どうしてここが*㍿*ですか?」
という質問に対して、「音が上がっているか
ら」「リズムがこうなっているから」などと、



○永網拓人(ながつな・たくと)
目黒区立東山小学校 主任教諭

子どもの本心が出ると、歌の表現も変わりますよね。音楽の時間、子どもたちに「何か言わなきゃ」とは思わせたくないんです。

もらったの。「音楽は、歌ったり合奏したり笛を吹いたりすることだと思っていました。でも僕は今日はそう思わなかった。もっと違うものがあるって気が付きました」って書いてあったんです。

縣：「違うもの」については、書いてあったんですか？

前田：『そうだと いいな』という歌の指導をしたんです。曲の途中で全休符があるんですよ。「この全休符は何？」と私が聞いたら、子どもたちは悩んでいろいろなことを言いました。結局私はお手紙を返すとき

に、「あの全休符は『窓』だと思うよ。窓から外を見たときの気持ちだと思うよ」と書いたんです。「その向こうから何が見える？」って。その男の子は結構わんぱくらしいのだけど、そういう子が鋭い感性をもっていることはよくありますね。「鳥の声が聞こえる!!」「風で木が揺れてる」ってご返事をもらいました。ちょっとはみ出している子のほうが、何かをもっているな、と感じるときがあります。そういう子が私は大好き。

ワークシートの生かし方

縣：先日、前田先生の指導を見せていただく機会がありました。『いつでもあの海は』で子どもたち一人一人に「海はどんな様子なの?」「それでどうなったの?」と考えさせると、子どもたちは真剣に集中して、その子なりに精いっぱい考えているんですね。そのとき、前田先生のような授業ができればワークシートはいらないのかなと思いました。

前田：「どんな海?」と聞いて、さらに「色は?」とか尋ねてみると、すてきな答えが返ってきましたよね。「じゃあ、それを書いておきましょう」とすれば、ワークシートも生きるんです。通りいっぺんのことを書く習慣ができてしまうのはよくない。書けば帰れると子どもは思いますからね。

永網：「海ってどんな色?」と聞かれたら、子どもも「どうなんだろう」と考えますよね。ただ「書きましょう」というのとは大きく違うんですね。

前田：「海だけかな?」と聞くと、「いや、空もある」と答えた。「すごい、広がったね」と私が言う、「うん!」と返事をしてくれ「砂浜、雲……」と話は尽きなくなる。

縣：どんな意見を言っても必ず認められ、子どもたちもすごくうれしそうでしたね。

後藤：もっとすごいのは、言葉がなくても前田先生が立つだけで子どもの音が変わるんだよね。そんなふうに誰もできないから、一生懸命悩むんですね。

永網：確かに、何も話さなくても前田先生がいるだけで変わっていきますよね。

前田：えーうそ。

後藤：私が色のことを聞いたら「青です」で終わってしまうけれど、前田先生が言う「次は何を考えてほしいのか」が伝わるんです。前田先生と同じ発問をみんながやっても同じにはならない。

教材をよく知り、大好きになる

前田：“パラタタタ、ドラムがきこえて”で始まる『パレード ホッポー』という教材がありますよね。子どもたちはみんな元気よく歌います。でも「“パラタタタ”って、どこから

聞こえてくるの?」と言うと「遠くから」と返ってくる。「なのにどうしてそんなに元気がいいの?」。そうすると小さく歌うのね。「その太鼓、破れてない?」って私は言うの。「太鼓が刻む音はやっぱり鋭くなくちゃ、パーンって音だよ」と。「ただホワホワ歌っているだけじゃだめだよ」と言うとき、小さいながらも鋭い音にしようとするわけ。そうすると音楽に躍動感が出てくる。「最後はパーンと広がって、空に音が響いていく」と子どもたちが言うようになる。「その青い空に何が見える?」と聞くと、いろんな答えが返ってくる。「雲が見える」「それだけ?お祭りじゃないの?」「風船が飛んでいる」。……こんなふうに小さな教材からでも、子どもと会話しようと思えばいくらでもできるんです。

永網：すごいなあ。

前田：『赤いやねの家』で“電車の窓から”と歌ったときに、「つり革だ」と言ったこともあります。そうすると子どもたちは「うん、うん」とうなずいて、「背の低い子だったらこうやって外を見るよね」と話し出す。そうして、「赤い屋根に向かって声を遠くに届けよう」という感覚が子どもから出てくる。こんなときほんとうにドキンとする。すごいすてきだなと思って。

縣：そうした子どもたちのため、私たち教師にとっての課題は何でしょうか？



○前田美子(まえだ・よしこ)

全日本合唱教育研究会副会長、合唱指導指揮者。長崎県出身。東京都葛飾区立南奥戸小学校を振り出しに、板橋区、青梅市、武蔵野市の小学校で、授業や課外活動を通じ、一貫して子どもと真っ直ぐに向き合い、子どもたちの歌う心をやさしく育ててきた。

前田：その教材をよく知る。大好きになること。

永網：そうなんだなあ。

前田：例えば『白鳥』の鑑賞だったら、どうして白鳥が湖に浮かんでいることしか子どもに言わせられないんでしょう。水があるということは、その向こうに空があるし、水の揺れ、水面に山が、森が映っているかもしれないし、そんなことを考えるとずっと広がるじゃない。

後藤：それを前田先生は子どもに言わないで、子どもたちが言うのを待つからすごいんですね。

前田：若いとき、研究授業をした後で指導講師に言われた忘れられない言葉があるんです。「前田先生の授業は、とても楽しい」とおっしゃった。そのあとに「でもね、音楽はもっと深いんだよ」と言われたことが、すごくこたえました。そこから「深いって何だろう」と悩むようになりました。四六時中、野菜を切っているときでも、子どもや表現のことを考えるようになったのも、それがきっかけでしょうね。

一同：（聞き入る）

子どもの前に立ったとき、「子どもは私を許してくれるかな」という思いでいると、子どもから出てくる言葉が違ってくる気がするんです。

いきいきとした音楽活動のために

前田：子どもから学びたい、という気持ちが強いです。子どもの前に立ったとき、「子どもが私を許してくれるかな」という思いが常にある。そうすると、子どもから出てくる言葉が違ってくる気がするんです。自分を無にしないと、子どもから何も入ってこないと思ったのね。

後藤：子ども自身がさらけ出してくれるかどうか、本当に大事ですね。

前田：私ね、子どもたちだけでなく、若い先生たちのことが好きなの。合唱団の子どももそうだけど、みんなうまくなったなと思うと通過していってしまう。追い抜かれて

私の前を通過していってしまうのは分かっているんだけど、それはそれでいいと思うの。通過していく前、その間、私の前をうろうろしてくれているのがすごく楽しいし、「負けないぞ、私もがんばらなきゃ」って思う。

永網：ぜひ通過したいですね。

後藤：通過しちゃうの!? ずっと背中を追いかけないと！

永網：そ、そうですね(笑)。

後藤：前田先生は30年間、ずっと変わらない。追いかけてもずっと距離が縮まらないです。新しいこと、おもしろいことをするのはいつも先生。

前田：そんなことない。

縣：心を育てる指導ができるようになったらいいなあ、と私もつくづく感じました。まだまだですが、今日はいろいろなヒントをいただいた気がします。

後藤：子どもたちに「集まれ!」と指示するとしたら、前田先生だったらどんな言い方をするのかな、どのタイミングで言うのかなとか、常に前田先生を意識してしまいます。

前田：子どもって、やっぱりスリルとサスペンスが好きなんだと私は思うの。だから先生たちも子どもと授業でスリルとサスペンスを大いに楽しんでください。



座談会の様子（2018年11月25日、東京都内）

受け継がれる合唱の心

第37回全日本合唱教育研究会全国大会 札幌大会

「さわやかな風とともに つながる心 響きあう歌声」
～共有・共感しながら音楽表現を高める合唱指導～

平成30年8月17日、「全日本合唱教育研究会全国大会 札幌大会」が札幌市教育文化会館(大ホール)で開催されました。大会の様子を、作曲者による合唱指導を中心にレポートします。

夏の札幌らしく、すっきりとした青空の広がる8月。少し肌寒いけれど心地よい風が通り抜ける大通公園を歩いて、会場へと到着した。平成26年度以来、4年ぶりとなる本研究会の全国大会の開催。心なしか懐かしい雰囲気とともに、参加者の期待も高まる。大会テーマは「さわやかな風とともに つながる心 響きあう歌声」。ここ札幌市では、合唱が教育の中でも特に大切な役割を担っているという。実行委員長の藤本尚人先生は、「札幌の合唱は、学習発表会や校内合唱コンクールといった学校行事を通して、学級づくり、学年づくり、そして学校づくりの大きな柱となっている。それらは長年にわたって諸先輩が地道に取り組んでこられた活動の成果」と述べた。その言葉どおり、市内の学校で行われる合唱活動は全国的にみてもハイレベルであり、完成度の高い歌声は特筆すべきものがある。

*

午前中の〈私たちの合唱指導〉では、これまで行ってきた合唱指導をもとに、作曲者自ら舞台上でアドヴァイスをしながら曲を仕上げていく過程が公開された。小学校の部では、若松敏先生作詞・作曲の同声合唱曲『ずっと…!』を幌西小学校合唱団(3～6年生)が演奏した。歌う前に、若松先生が子どもたちに「50パーセントの仕上がり具合で歌ってみて」とリクエスト。そこからどのように完成度を高めていくのか、聴衆も期待しながら見守った。

同曲には「卒業するときに万感の思いを込めて歌ってほしい」と



開会式。左から全日本合唱教育研究会会長の飯沼信義先生、若松 敏先生、大熊崇子先生、田久保裕一先生

いう願いが詰まっている。作者の思いを鮮やかに表現するために、歌詞に出てくる「桜」のイメージを子どもたちと共有するところから始まった。北海道は卒業式の時期に桜が咲いている地域ではないのだが、子どもたちは一生懸命にイメージを膨らませていたよう。「桜が舞ってきて、その中を歩いてみよう」「桜がわーっと舞っているようなイメージで」と若松先生が言葉を掛けるたびに、子どもたちの歌に躍動感が生まれる。また、「アクセントが付いている言葉の前にエネルギーを感じてみよう」と語りかけ、効果的な言葉の立て方を指導することで、歌声も立体的になっていった。

*

中学校の部は、大熊崇子先生作曲の混声合唱曲『生きる』。市内3校から集まった合同合唱団の生徒たちが演奏した。同曲は東日本大震災のときにつくられたもので、被災地の人々が少しでも元気になるようにとの思いが込められている。谷川俊太郎氏の生命力あふれる詩が、テンポよく転調を繰り返しながら歌われる。生徒たちはノリよく転調を楽しんでいる様子で、会場も明るい雰囲気。

大熊先生からのアドヴァイスは、「生きている感じが出てくるように歌うこと」。例えば「生きているということ」という歌詞は、「生きて」「いると」「いうこと」の3つの文節に区切ることができる。こうした区切りを意識して歌うことで、言葉のリズムが生まれ、生徒たちの歌い方もより軽やかになっていく。ある生徒からは、「『泣けるということ 笑えるということ 怒れるということ 自由ということ』

という歌詞を通して、自分たちは感情表現が制限されず、自由に過ごせる。それが生きるということなんだと思った」という感想が聞かれた。合唱を通して、詩をしっかりと自分のものになっているようだった。

*

午後は〈合唱指揮法講習〉から始まった。指揮者の田久保裕一先生と、午前中にも登壇された若松先生、大熊先生の3名が、「指揮者の視点」と「作曲家の視点」のそれぞれから楽曲の分析を行う。「作曲家の思いを100とすると、実際に楽譜に書かれているのはその20パーセントぐらい。楽譜に表せないものがたくさんある。だから指揮者は楽譜を深く読み込んで、その思いを感じ取って手を動かすのです」。そう述べる田久保先生の熱のこもった指導が印象的だった。



〈合唱指揮法講習〉で指揮をする田久保先生



札幌市立東白石小学校と南白石小学校の合同合唱団による『PRIDE(プライド)』の演奏。指揮は向出 彰先生

それに続く〈研究演奏〉では、札幌の子どもたちらしい、みごとな合唱が披露された。小学生による『太陽のうた』『PRIDE(プライド)』(ともに作詞・作曲:若松 敏)では、ノリのよい振り付けとともに快活な歌声が響く。中学生の『くちびるに歌を』(作詞:ツェーザー・フライシュレン／作曲:信長貴富)は、大人顔負けの男声の安定した低音と、のびやかな女声の高音による、厚いハーモニーが会場を圧倒。最後の合同演奏『永遠のマーチ』(作詞:新井鷗子／作曲:若松 敏)では、若松先生自らが小中学生からなる大合唱団を指揮した。

大会が終わる頃、会場に不思議な一体感が生まれたのは気のせいではないだろう。参加者たちもよい刺激を受け、これからの合唱指導につながるヒントを得られたに違いない。合唱のすばらしさ、音楽の豊かさを再確認する有意義な大会であった。

(ヴァン編集部)



〈私たちの合唱指導〉若松先生と札幌市立幌西小学校の児童たち。指導者は五十嵐真起子先生



〈私たちの合唱指導〉大熊先生の伴奏で歌う市内中学校合同合唱団の生徒たち。指揮は藤原潤子先生



閉会式での全員合唱『ふるさと』



フィナーレを飾った合同演奏『永遠のマーチ』

楽しさが集結！ とっておきの2日間

第4回
こどもの夢ひろば“ボレロ”
～つながる・集まる・羽ばたく～

みつけた！

2018年7月31日、8月1日「こどもの夢ひろば“ボレロ”」が開催されました。ピアニストの小山実稚恵氏の発案で始まった、子どもたちが多彩なコーナーに参加できる本イベントは今年で4回目。仙台市の夏の催しとして定着し、多くの来場者が集まります。



「ボレロ」大集合コンサート（コンサートホール）

レポート
No.2

子どもたちの未来のために

毎夏、宮城県仙台市では「こどもの夢ひろば“ボレロ”～つながる・集まる・羽ばたく～」が2日間にわたって開催されている。これは子どもたちに大人気のイベントで、仙台市出身の世界的ピアニスト、小山実稚恵氏のプロデュースにより2015年からスタートしたもの。「子どもたちが未来に羽ばたくきっかけになるような本物の技やパフォーマンスを体験する場を提供したい」という小山氏の強い思いで実現した。このアイディアに賛同した市や企業が立ち上がり、「こどもの夢ひろば“ボレロ”実行委員会」、仙台市、仙台市市民文化事業団が主催となって、イベントを運営している。

*

その名のとおり「夢ひろば」となる会場は、日立システムズホール仙台。コンサートホール、シアターホール、研修室、パフォーマンス広場、和室や茶室、クッキングルーム、ギャラリー……、施設のほぼ全てを開放し13か所で展開される。そして、それぞれの



地下1階のパフォーマンス広場での「パフォーマンスフェスタ/ジャグリング」。この場所では、他の時間帯に「みんなで踊ろう！アロハ～！フラ！」「ミュージカルの幕をあけよう！」なども行われた

場所で音楽、科学、スポーツ、茶道、料理、アートなど、さまざまなジャンルの体験型イベントが、専門家を招いて行われる。

入場するには、この「こどもの夢ひろば“ボレロ”」のメインであるコンサート「“ボレロ”大集合コンサート」のチケット(500円)を購入し、当日会場入口の総合受付に提示すると、首から下げるパスポートをもらえる。そのパスポートがあれば、会場内の全てのイベントで遊ぶことができるのだ(一部事前予約制イベントあり)。500円でコンサートが聴けて、さらに1日中子どもたちは自由に多彩な体験をすることができるから、まさに“お得感満載”と言えるだろう。子どもも大人も一緒に目いっぱい楽しめるイベントが、来場者を待っているからうれしい。



会場の様子

プロと『ボレロ』を協演！

今年は第4回となるが両日ともに満員で、平日にもかかわらず、2日間で計3,095名が訪れたという。

ヴァン編集部は2日目に取材を行ったが、朝から会場は大にぎわい。防災士でサイエンスインストラクターの阿部清人氏による「おもしろサイエンスショー&コンサート」、2004年アテネオリンピック男子体操代表、金メダリストの中野大輔氏が講師を務める「ふわふわトランポリン」、茶道裏千家淡交会有志が伝統を伝える「お抹茶体験コーナー」「茶道ワークショップ」など、プロが本気で子どもに向き合う姿が印象的だった。

「みつけた！楽器の正体！」では、指揮者の広上淳一氏とピアニストの小山実稚恵氏、NHK交響楽団と仙台フィルハーモニー管弦楽団の楽団員が、抽選で選ばれた子どもたちをステージに迎えて、楽器について解説。また、日立システムズが開いた「驚きと感動のIT教室」では、子どもたちが実際にロボットのパーツを組み立てながら簡単なプログラミングを学習し、各自が作り上げた車型ロボットでレースを行った。

*

イベントの目玉「“ボレロ”大集合コンサート」は各日2公演(2日間で計4公演)。演奏はこの2日間のために結成された、オーディションを通過した子どもたち、NHK交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、東京音楽大学と宮城教育大学他の学生オーケストラによる「こどもの夢ひろばスペシャルオーケストラ」が務めた。指揮は広上淳一氏、ピアノは小山実稚恵氏で、プログラムはブラームス『ハンガリー舞曲第5番』、ドビュッシー『小組曲』から「小舟にて」「バレエ」、ラヴェル『ボレロ』（編曲版）。いずれの曲も、オーディションで選ばれた子どもが小山氏と連弾で披露する。また各曲の前には、広上氏がピアノを演奏する子どもにインタビューし、会場は温かな空気に包まれた。



黒崎研志氏が講師を務める「まんがキャラクターの世界」（研修室1）



「ふわふわトランポリン」（交流ホール）。事前予約の体操教室講師は、2004年アテネオリンピック男子体操金メダリストの中野大輔氏



仙台市ガス局のコーナー「ガスの炎で料理体験」（クッキングルーム）



茶道裏千家淡交会有志による「お抹茶体験コーナー」（和室1・2）



「おもしろサイエンスショー&コンサート」（シアターホール）



「みつけた！楽器の正体！」
(コンサートホール)

『ボレロ』はこの日のために用意された吉川和夫氏編曲版で、合唱とダンス付きの豪華な編成。ダンスの振付を担当したミュージカル女優の竹田理央氏が子どもたちと一緒に踊り、会場には、オーケストラとピアノ連弾、子どもたちの歌声が響き渡って、大いに盛り上がった。

会場のあちこちで子どもたちの生き生きとした笑顔を目にする度、小山氏の「本物を提供したい」という思いが伝わっていることを感じた1日であった。本イベントがこれからも子どもたちに夢を与え続けてくれることを願っている。(ヴァン編集部)

Interview

吉川和夫先生

「“ボレロ”大集合コンサート」用にラヴェルの『ボレロ』を編曲した吉川先生にお話を伺いました。

Q 合唱も含まれた『ボレロ』でしたが、編曲にあたって、意識したことはありますか？

小山実稚恵さんからは、子どもたちが演奏に参加できるようにとのお願いでした。せっかくだから、たくさん子どもたちに参加してもらいたいと思い、ピアノ連弾だけでなく、合唱のパートも作って歌えるようにしようと考えました。そんなわけで、歌詞も私が考えることになりました。明るく夢のある歌詞にしたいと思いました。

Q コンサートで『ボレロ』はたいへん盛り上がりました。客席でお聴きになっていかがでしたか？

お客様は、大人も子どももみんなワクワクしながら集まっているのが分かります。一体感が生まれる作品ですから、演奏を楽しんでいるのが伝わってきます。竹田理央さんのすてきな振付で、お客様が曲に合わせて一緒に体を動かせる場面があるのもいいですね。この企画がすっかり定着したことをうれしく思います。



吉川和夫先生
(作曲家／宮城教育大学 教授)
(c) 姫田蘭



「ペイントワークショップ～スポンジを使って色を入れよう！～」は子どもたちとオノ・ルイーゼ氏が合作を披露(エントランスステージ)

パスポートで遊べるイベント一覧

- ・みつけた！楽器の正体！
- ・ペイントワークショップ～スポンジを使って色を入れよう！～
- ・イリュージョンアート～まさかさかさ～
- ・太鼓を叩こうよ！
- ・おもしろサイエンスショー＆コンサート
- ・ふわふわトランポリン
- ・まんがキャラクターの世界
- ・ひょうたん楽器づくり体験～作って・描いて・鳴らして・遊ぼう！～
- ・驚きと感動のIT教室～ロボットを動かすプログラミングを体験～
- ・こどもミュージアム(〔7月31日〕縄文人に変身／〔8月1日〕むかし遊び)
- ・ガスの炎で料理体験
- ・ガスに関する安全・安心の体験コーナー
- ・茶道ワークショップ
- ・お抹茶体験コーナー
- ・みんなで踊ろう！アロハ～！フラ！
- ・パフォーマンスフェスタ
- ・ミュージカルの幕をあけよう！

※一部事前予約や整理券配布あり

レポート
No.3

創立60周年記念

第29回 わかば音楽教室 ピアノ発表会

平成30年10月6日、宮城県遠田郡美里町の美里町文化会館で、わかば音楽教室の創立60周年を記念したピアノ発表会が開催されました。

昭和32年に設立された「わかば音楽教室」は、親子三代に受け継がれ地域に根付いている、長い歴史をもつ音楽教室です。館内聖美先生、佐藤美哉先生の姉妹と、お母さまの佐藤済美先生の3名が講師として指導にあたっています。館内先生は、合唱曲『チャレンジ!』『てのひら』『夢を追いかけて』などの作曲者でもあります(3曲とも、作詞は夫の館内浩二氏)。

発表会は40名を超える生徒が出演しました。第1部は幼稚園の年長さんからスタート。初めて発表会に出演するお子さんがほとんどですが、皆さん堂々としています。小学校3・4年生になってくると、表情豊かな演奏が続きます。小さな子どもたちは、「お兄さんお姉さんの演奏はさすが！」という思いで聴いていたことと思います。

第2部の冒頭では、小学校6年生までの生徒全員がステージに上がり、館内先生の指揮で『チャレンジ!』を合唱。元気な歌声がホールいっぱいに響きました。

第3部では、「創立60周年記念演奏」と題して、2台のピアノを使った親子演奏やピアノ独奏に加え、新しい合唱曲『希望の光』(作詞：館内浩二／作曲：館内聖美)が、中学生、高校生と保護者の皆さんによって披露されました。

第4部の中学生以上の生徒のあとは、佐藤美哉先生と館内先生による2台ピアノの演奏『スペイン』(作曲：シャブリエ)です。迫力ある熱演に観客達は釘付けになりました。

生徒の皆さんの努力や思い、そして達成感に満ちた表情があふれる、たいへん温かな雰囲気のパiano発表会でした。今日の充実感を忘れることなく、一人一人が音楽を楽しみながら、また次回の発表会に向けた練習が続いていくことでしょう。

(ヴァン編集部)

- 1 ピアノ独奏。ステージ看板も館内浩二氏が制作
- 2 生徒の演奏に拍手を送る館内聖美先生
- 3 館内先生の指揮で『チャレンジ!』を歌う
- 4 先生による2台ピアノ演奏



子ども一人一人が 音や音楽と豊かに 関わる姿を求めて

平成30年度 全日本音楽教育研究会全国大会
(小・中学校部会大会)

和歌山大会
第60回 近畿音楽教育研究大会 和歌山大会
第56回 和歌山県音楽教育研究大会 和歌山市大会

〈大会主題〉
《のびる》《ひろがる》《ひびきあう》
～実りある音楽の授業～

秋の明るい朝の日ざしの下、「全日本音楽教育研究会全国大会和歌山大会」が幕を開けた。

和歌山県で全国大会が行われるのは昭和51年以来、42年ぶり。開催地の和歌山市は、さまざまな観光地を有する楽しい街だ。豊かな自然と黒潮がもたらす温和な気候ならではの郷土料理も魅力的であり、市の中心に建つ和歌山城天守閣は、この秋に再建60周年を迎えたばかり。会場近辺を歩いてみれば、市内を流れる紀の川や和歌川から潮の香りがするの、雄大な海に面したこの土地の特徴だろう。文化と歴史にも恵まれた紀の国・和歌山では、日々熱心に音楽科教育が行われている。

本大会の大会主題は「《のびる》《ひろがる》《ひびきあう》～実りある音楽の授業～」。児童・生徒一人一人の学んだ知識と技能とが心と体に染み込み、それらが他者との協働を通じて活用・発展させ続けられるような学びを研究するために設定された。これまでの実践の課題や、新学習指導要領に示された音楽科の目標を踏まえながら、現行の学習指導要領を基盤とした音楽の授業づくりを目指したという。

*

11月8日午前、和歌山市立伏虎義務教育学校では「一人一人の確かな学びを育む音楽の授業づくり」を研究主題に、小学校部会の5つの授業実践が行われた。表現領域の歌唱は山路直美先生(紀の川市立長田小学校)と久保純子先生(和歌山市立宮小学校)、器楽は足立昌子先生(和歌山市立高松小学校)、音楽づくりは北川真里菜先生(和歌山大学教育学部附属小学校)、鑑賞領域は吉水紗世先生(和歌山市立伏虎義務教育学校)がそれぞれ担当した。

同じく8日午前、和歌山市民会館で行われた中学校部会の授業実践は2つ。研究主題は「一人一人の確かな学びを生かす音楽の授業づくり」である。まず市民ホールで、脇田裕巳先生(和歌山市立楠見中学校)による創作の授業「言葉のもつリズムや抑揚を手がかりに、簡単な旋律をつくろう『自作の俳句、川柳』」のあと、小ホールで井谷真奈美先生(和歌山市立伏虎義務教育学校)による歌唱の授業「情感をこめた歌い方を工夫しよう『ぜんぶ』」が行われた。どの授業でも児童、生徒は真剣に取り組んでおり、積極的に音楽と向き合う姿が印象的だった。



合同演奏『明日へと』

平成30年11月8日・9日、「全日本音楽教育研究会全国大会和歌山大会」が和歌山市立伏虎義務教育学校、和歌山市民会館、和歌山県民文化会館で開催されました。大会の2日間を、小学校部会と中学校部会の発表を中心にレポートします。

午後は参加者が和歌山市民会館に集まり、部会総会に出席した。そのあとのワークショップには講師として作曲家や指揮者、能楽師、音楽教育者などが迎えられ、そこで実施された5つの講座(歌唱1、歌唱2、能楽、鑑賞、創作)は充実したものとなって、研究を深めることにつながったことと思う。

*

翌日、11日9日に和歌山県民文化会館で開かれた全体会の研究演奏は、和歌山県にちなんだ歌や民謡を中心としたプログラムが組まれた。どの学校も子どもたちの演奏のすばらしさが目立ったが、何よりも音楽を楽しむ姿が伝わってきた。そのあとの全体講評(臼井学先生・志民一成先生／文部科学省初等中等教育局 教育課程課 教科調査官)では、小学校部会については志民先生が「いずれの授業でも子どもたちがしっかりと自分の思いや意図をもち、やわらかな和歌山の言葉で互いに共感し合う姿がすてきでした。一人一人の学びが充実しているからこそ、他者と協働する音楽科の学びも実り豊かなものになるということを、今大会の研究は示唆してくださいました」と述べ、中学校部会については臼井先生が「ベテランの域に達している2人の先生が、長年子どもと向かい合い、苦労と工夫を重ねてこられたからこそ実現できる授業の味わい、生徒との接し方を若い先生がたには受け取っていただきたい。これまでの自分のスタイルにとらわれず、常に授業改善を目指して学び続けている姿も心に刻んでほしいと思います」と語った。続く記念講演には、和歌山県出身のヴァイオリニスト、澤和樹氏(東京藝術大学学長)が登壇し、自身のこれまでの人生についてユーモアも交えながら温かな語り口で振り返り、会場の笑いを誘った。そして雰囲気が一転、コンサートでは『タイスの瞑想曲』『愛の挨拶』『浜辺の歌』『情熱大陸』などを披露した(ピアノ伴奏：蓼沼恵美子氏)。

“平成最後”となる本大会には多くの参加者が集まり、たいへん意義深いものになったと感じる。この和歌山での2日間が、これから全国の子どもたちの長い未来へとつながっていくことだろう。

次回、発足50周年記念の節目を迎える全日本音楽教育研究会全国大会は、2019年10月31日、11月1日に東京都で開催される。

(ヴァン編集部)



山路直美先生
(紀の川市立長田小学校2年生)
歌唱「ようすをおもいうかべよう『海とおひさま』」



久保純子先生
(和歌山市立宮小学校5年生)
歌唱「曲想を生かして歌おう『小さな鳥の小さな夢』」



足立昌子先生
(和歌山市立高松小学校2年生)
器楽「ようすをおもいうかべて『小ぎつね』」



北川真里菜先生
(和歌山大学教育学部附属小学校2年生)
音楽づくり「リズムで大へんしん! いろんな子犬にへんそうしよう!」



吉水紗世先生
(和歌山市立伏虎義務教育学校4年生)
鑑賞「日本の音楽に親しもう『さくらさくら』」



脇田裕巳先生
(和歌山市立楠見中学校1年生)
創作「言葉のもつリズムや抑揚を手がかりに、簡単な旋律をつくろう『自作の俳句、川柳』」



井谷真奈美先生
(和歌山市立伏虎義務教育学校9年生)
歌唱「情感をこめた歌い方を工夫しよう『ぜんぶ』」

研究演奏



和歌山大学教育学部
附属小学校 6年生



和歌山市立加太小学校
4～6年生



和歌山市立広瀬小学校
4～6年生



和歌山市立日進中学校
合唱部



紀の川市立打田中学校
吹奏楽部

Information

2019年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研 究 大 会

6月 June

●21日(金)

第61回 近畿音楽教育研究大会 兵庫大会
神戸文化ホール 他

〈大会主題〉
心動く瞬間を求めて

〔問い合わせ〕
第61回 近畿音楽教育研究大会 兵庫大会 事務局
神戸市立北五葉小学校 校長 高本 健
〒651-1131 神戸市北区北五葉3-7-1
TEL 078-591-1196／FAX 078-591-1198

10月 October

●11日(金)

第61回 北海道音楽教育研究大会旭川上川大会
旭川市民文化会館 他

〈全道共通主題〉
音楽のよさを生かし、豊かな心と確かな力を育む音楽教育

〈旭川上川大会主題〉
音楽のよさや美しさを感じ、音楽と豊かに関わる力を育む音楽教育の創造

〔問い合わせ〕
第61回北海道音楽教育研究大会旭川上川大会事務局
旭川市立豊岡小学校 校長 鈴木由美子
〒078-8240 旭川市豊岡10条3丁目
TEL 0166-31-0251／FAX 0166-31-0252

●31日(木)、11月1日(金)

2019年 全日本音楽教育研究会全国大会 東京大会
(総合大会)

全日本音楽教育研究会発足50周年記念

練馬区立練馬文化センター 他

〈大会主題〉
つなげよう 深めよう 生かそう ♪未来を拓く音楽の学び♪

〔問い合わせ〕
全日本音楽教育研究会全国大会 東京大会(総合大会)事務局
事務局長 江東区立深川第六中学校 副校長 佐藤隆弘
〒135-0023 東京都江東区平野3-6-13
TEL 03-3642-4868／FAX 03-3820-4706
ta-satou@koto-edu.jp

11月 November

●7日(木)

第67回 東北音楽教育研究会福島大会
福島市音楽堂 他

〈大会主題〉
心にひびく音楽を求めて(仮)

〔問い合わせ〕
事務局
川俣町立飯坂小学校 教頭 佐々木信晴
〒960-1401 福島県伊達郡川俣町飯坂字南古堂道内5
TEL 024-566-2440／FAX 024-538-2556

●8日(金)

第16回 東海北陸小中学校音楽教育研究大会 愛知大会
平成31年度 愛知県小中学校音楽教育研究大会 一宮大会
一宮市民会館 一宮市立富士小学校

〈大会主題〉
ー夢織るまちから伝えたいー
音楽の力で 結び織りなす 生きる喜び

〔問い合わせ〕
大会事務局
一宮市立丹陽南小学校 教頭 山田泰司
〒491-0824 愛知県一宮市丹陽町九日市場2666番地
TEL 0586-28-8713／FAX 0586-77-3033
yamada.taiji0fj@city.ichinomiya.aichi.jp

●15日(金)

第61回 関東音楽教育研究会 神奈川大会
よこすか芸術劇場 他

〈大会主題〉
音・人・心 ともにつなげる 音楽の力

〔問い合わせ〕
事務局
横須賀市立鷹取中学校 校長 古敷谷博明
〒237-0066 神奈川県横須賀市湘南鷹取2-30-1
TEL 046-866-3800／FAX 046-866-3906

●15日(金)

第50回 中国・四国音楽教育研究大会徳島大会
阿南市文化会館(夢ホール) 他

〈大会主題〉
つなげよう 深めよう 音楽のよろこび

〔問い合わせ〕
事務局
美波町立日和佐小学校 校長 大西育郎
〒779-2305 徳島県海部郡美波町奥河内字本村34番地1
TEL 0884-77-0055／FAX 0884-77-0095
kogame@hiwasasyo.minamicho.ed.jp

●21日(木)、22日(金)

第60回 九州音楽教育研究大会 長崎大会
第59回 長崎県音楽教育研究大会 佐世保大会
アルカスSASEBO 他

〈大会主題〉
㊤わやか ㊤きいき ㊤んどう ㊤つまでも 温故創新

〔問い合わせ〕
事務局
佐世保市立日宇小学校 教諭 平島恭子
〒857-1151 佐世保市日宇町284番地
TEL 0956-31-6904／FAX 0956-31-6919

教育芸術社ホームページでは、この他の研究大会や
イベントなどの情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/



ー 新作合唱曲による公開講座 ー

Spring Seminar

コンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar 2019」を開催いたします。
同声・女声・混声の各2曲(全6曲)を合唱団、司会者、作曲家と学びます。
セミナー終了後「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーも行います。

● 日 時：2019年3月28日(木)
12:45～17:20
会 場：武蔵野音楽大学(江古田キャンパス)
中ホール「ブラームスホール」
〒176-8521
東京都練馬区羽沢1丁目13-1

西武池袋線「江古田駅」北口 徒歩4分
西武有楽町線「新桜台駅」4番出口 徒歩4分
東京メトロ有楽町線/副都心線
「小竹向原駅」2番出口 徒歩9分

参加費：5,000円(高校生以下2,000円)
資料・楽譜テキスト代を含む

● 司 会：藤原規生
作曲家：[同声] 山下祐加、三宅悠太
[女声] 名田綾子、大田桜子
[混声] 佐井孝彰、千原英喜

合唱団：八千代少年少女合唱団
(指揮：長岡利香子)
女声合唱団 ゆめの缶詰
(指揮：相澤直人)
ユースクワイア アルデバラン
(指揮：佐藤洋人)

● Nコンワンポイントレクチャー
講 師：藤原規生、相澤直人、三宅悠太
(小中高未定)

● お問い合わせ：
株式会社教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740
<https://www.kyogei.co.jp/>

申込み受付中です(先着順で定員になり次第締め切らせていただきます)。

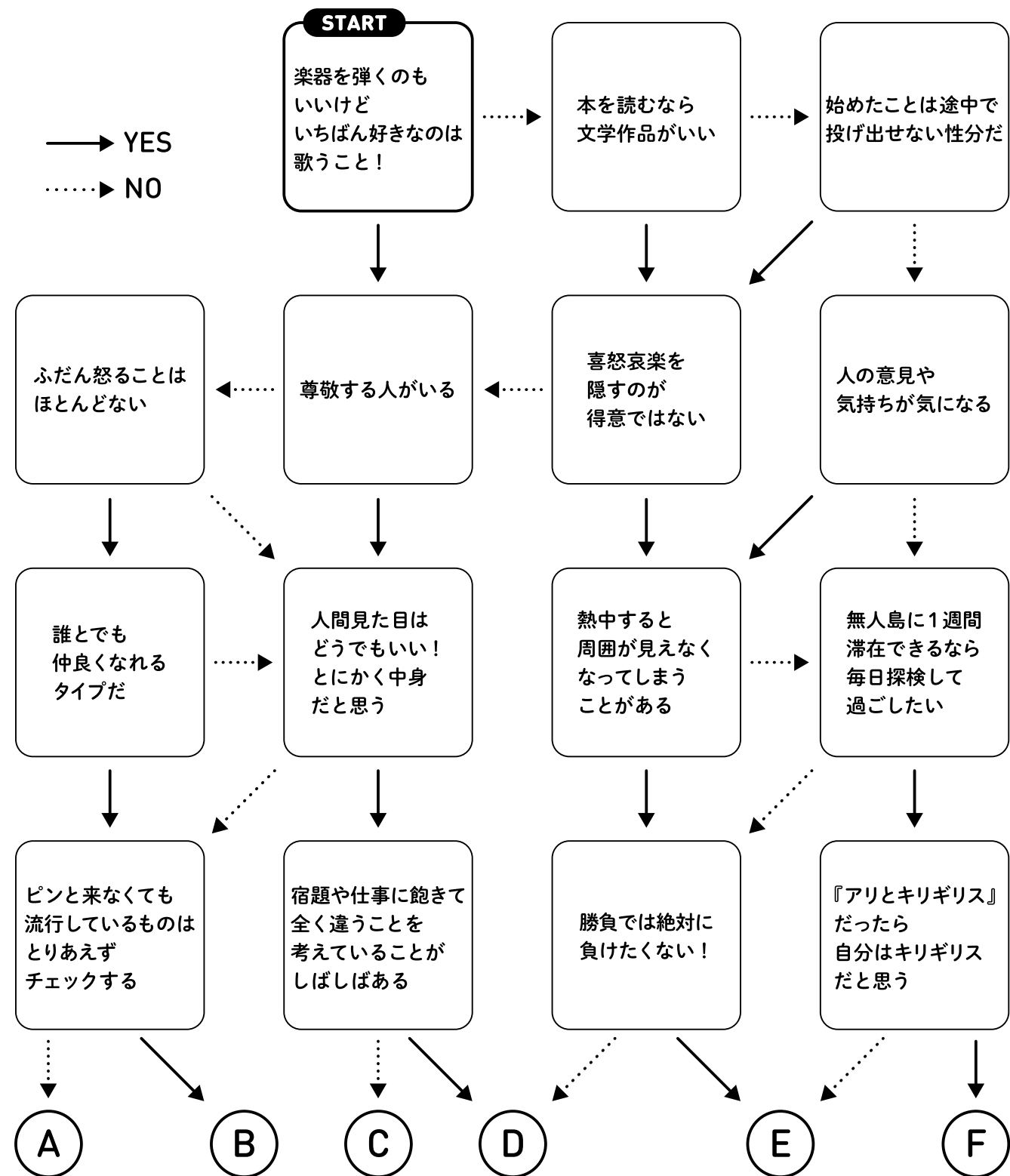
音楽診断

第5回

オーストリアの作曲家編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第5弾。今回のテーマはオーストリアの作曲家です。オーストリア出身の有名な6人の作曲家の中から、あなたに似ている人物をご紹介します。

監修・解説＝奥田佳道
Text＝Yoshimichi Okuda



あなたのタイプは？

A 「パバ」と慕われた国際派 ハイドン (1732-1809)

幼少の頃は合唱団(ウィーン少年合唱団の前身)で歌い、大人になってからはボヘミアの名家を経てハンガリーの貴族エステルハージ侯爵家に長く仕えた。パリでもその名を知られ、晩年には2度ロンドンに招かれた国際派である。ウィーン古典派の「パバ」で、たくさんの交響曲、弦楽四重奏曲、ピアノ・ソナタの他、『天地創造』など声楽曲もすばらしい。モーツァルトを高く評価。ベートーヴェンにも好ましい影響を与えた。長生き。

*ハイドンは、周囲の人々から「パバ・ハイドン」という親しみを込めた愛称で呼ばれていた。



B 社会情勢に敏感、人々に愛されて華やかに活動 ヨハン・シュトラウス2世 (1825-1899)

言わずと知れたワルツ王。弟ヨゼフ、エドゥアルトもワルツやポルカの素晴らしい作曲家。彼らの父は『ラデツキー行進曲』を作曲したヨハン1世(父)。というわけでヨハン2世はシュトラウス・ファミリーの顔でもある。一夜に舞踏会を掛け持ちするほどのスターでロシア、アメリカでも演奏。オペレッタ『こうもり』も代表曲。もともと男声合唱曲として書かれた『美しく青きドナウ』は歌詞が変わり、オーストリア第二の国歌となった。



C 誠実な人柄で友人にも恵まれた“歌曲王” シューベルト (1797-1828)

声変わりするまでコンヴィクトと呼ばれたウィーンの寄宿制神学校でサリエリに学ぶ。多数の宗教曲、交響曲、弦楽四重奏曲、室内楽、ピアノ・ソナタ、歌劇を作曲。特に歌曲王として知られる。『糸を紡ぐグレートヒェン』『野ばら』『魔王』『美しい水車小屋の娘』『冬の旅』と枚挙にいとまがない。交響曲では没後に陽の目を見た『未完成』や『グレート』が有名。屈指のメロディーメーカー(旋律作家)だが、筆致は思いのほか大胆。



D 信じたものには一直線、自分に正直な探求者 ブルックナー (1824-1896)

ドナウ河畔の小村に生まれ、教師を経てリンツ大聖堂のオルガン奏者となる。ウィーンの音楽理論家から対位法や和声法などを学び、ウィーン楽友協会附属音楽院の教授、オルガン奏者として活動。その後、孤高の作風をもつ交響曲の作曲家として歩み出す。しかし長らく認められなかった。周囲の意見や本人の考えもあり、一度書いた交響曲を何度も改訂したことでも有名。ゆえに多くの稿や版(出版譜)が存在。熱狂的なファンをもつ。



E 惹きつけられる魅力たっぷり、指揮者としても大活躍 マーラー (1860-1911)

「やがて私の時代が来る」と「予言」したとか。ボヘミア生まれのユダヤ人。ウィーン楽友協会附属音楽院で学ぶ。敏腕のオペラ指揮者として東欧、中欧でキャリアを重ねるとともに、大規模な交響曲を作曲。奇しくもブラームスが亡くなった1897年にカトリックへ改宗し、ウィーン宮廷歌劇場の監督に就任。その後メトロポリタン・オペラ、ニューヨーク・フィルでも活躍。交響曲や歌曲が有名である。



F 大人気を博した“神に愛された者” モーツァルト (1756-1791)

ザルツブルクの宮廷音楽家でヴァイオリンの名教師でもあった父レオポルトに連れられ、幼少の頃からイタリア、イギリス、今のドイツなどを旅。ザルツブルクの大司教と決裂後、ウィーンを拠点にしばらくの間はフリーランスの音楽家として活動。新作を披露する予約演奏会で人気を博す。「神に愛された者」という意味のアマデ(後にアマデウス)をミドルネームにもつ。バロックの技法にも精通。あらゆるジャンルに傑作を書いた。



奥田佳道(音楽評論家)

1962年東京生まれ。ヴァイオリンを学ぶ。ドイツ文学、西洋音楽史を専攻。ウィーン大学に留学。NHKや日本テレビ、WOWOWの音楽番組に出演。現在NHK-FM「オペラ・ファンタスティカ」パーソナリティのひとり。「ラジオ深夜便〈奥田佳道のクラシックの遺伝子〉」などに出演中。著書に「これがヴァイオリンの銘器だ」(音楽之友社)ほか。